
とある暗部の電撃使い

サーケイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある暗部の電撃使い

【Nコード】

N3597N

【作者名】

サーケイ

【あらすじ】

学園都市の闇である暗部組織。その一員である摂津京輔は学園都市で起きる様々な事件に巻き込まれていく。

話の内容や、単語を少々変えてみました。

オリジナルの主人公の一人称で進んでいきます。それらが苦手な方はご注意ください。この作品はとある魔術の禁書目録の二次創作となっております。様々な方の素晴らしい作品を読み、影響を受けて

書いてみようと思いました。初心者なので文脈など無茶苦茶な部分などありますが、楽しんで読んでいただけたら幸いです。

第一話（前書き）

この作品は学園都市の暗部組織の一員である摂津京輔の視点でシリ
アスあり、コメディありで書いています。オリジナルの主人公が苦
手な方はご注意ください。この作品はとある魔術の禁書目録の二次
創作となっております。様々な方の素晴らしい作品を読み、影響を
受けて書いてみようと思いました。なので多少似ている設定などあ
るかもしれないと思いますが、寛容な心で軽く見逃していただける
とありがたいです。初心者なので文脈など無茶苦茶な部分などあり
ますが、楽しんで読んでいただけたら幸いです。

第一話

6月下旬

6月と言えば梅雨のイメージのせいか1年で一番雨が降る季節だと思っ

それは人口約230万を誇り、世界で一番科学が発達しているこの学園都市でも同じで最近雨の日が多い。

学園都市では他と違い『樹形図ツリーダイアグラムの設計者』というスーパーコンピューターの予測のおかげで天気予報が外れない。

外れてほしいが今日も天気予報は外れておらず、ウザいことに3日ほど雨が続いている。

俺こと摂津京輔は学校も終わり友達と別れた後、帰り道の途中にある24時間営業のスーパーに寄って晩飯になる予定の日替わり弁当を買い、寮へ帰っている途中でケータイが鳴った。

メールだ。

嫌な予感がしながらもケータイを開いてみると、仕事内容と場所が書かれたお仕事のメールだった。なんで嫌な予感したのは当たるんだ？

「はあゝまったく、泣けるね。」

雨で気分が乗らないのに面倒なお仕事が入って正直憂鬱な気分になる。

今回のお仕事は学園都市の内部情報を外の科学結社に売ろうとしている研究者を粛清することだ。

イライラをぶつけるように勢いよくケータイを閉じてズボンのポケットにしまい、俺は仕事の準備に取り掛かった。

第一〇学区。

この学区は学園都市の全23学区の中でも最も土地の値段が安いせいか、他の学区と比べると研究所が多いらしい。

普段意識していないけど、たしかに言われてみればこの学区は学校よりも研究施設が目立っている気がする。

ターゲットが所属している研究所もこの学区の一角にある一般的な研究所の一つのようだ。

午後10時過ぎ、俺をサポートしてくれる下部組織の連中の車で研

研究所の近くまで接近してみたけど、この研究所には遅くまで残つてやる研究はしていないのか、それともさっさと帰りたい奴らが多いのかはわからないけど建物の明かりはほとんど消えている。

車に乗ったまま自前の携帯端末で研究所のコンピューターにハッキングしてターゲットが残っていることを確認した、他には警備の人間が一人しか残っていないらしい。

こんな時間まで一体何をやってるんだ？ 売る情報の収集でもしているのか？

監視カメラの映像にダミーを流し、セキュリティを解除した後俺は研究所に侵入した。

研究所の警備員はご丁寧に正面入り口の側の警備員室でのんびりテレビを見てやがったから即効性の高い麻酔銃で眠ってもらった。

麻酔銃ではなくグリップ部分に大容量超小型バッテリー内蔵のサブレッサー付きのコイルガンに持ちかえ、静まり返る研究所内の廊下を歩きターゲットの研究室に向かう、明日も学校があるからできるだけサッサと終わらせたい。

ターゲットがいる研究室にたどり着き銃を構えたまま扉を開けると、実験器具や研究資料らしき物が乱雑に置かれた部屋の隅に呑気にコーヒーを飲んでいる髭面で白衣を着た男がいた。

こいつがターゲットだったな…それにしても緊張感が無いな、たぶん自分が狙われてるって自覚ないんだろうな。

ターゲットの奴は扉の開く音に気が付いたのか、こっちを振り向い

て、口に含んでいたコーヒーを吹き出した。

マジかよ？いきなり銃持った男がいたら驚くだろうけど、吹き出すなんてマンガとか以外でもあり得るのかよ？

汚い奴だと思いながら、俺は仕事を終わらせるために銃を構えて

「悪いけどこれも仕事なんだ、悪く思わないでくれよ。」

ターゲットに死刑宣告をする。

「くそっ！！まさか統括理事会の手先か！？も、もうばれたのか。」

ターゲットは隠し持っていたらしい小型の銃を懷から取り出し、こっちに向けて発砲しようとするが

パシユッ！！

そう簡単に撃たせるわけなく、俺が先に銃を相手の銃狙って撃った。

「ぎゃああああああ！！」

俺の放った弾丸は銃をバラバラに破壊し、握っていた右手の指も数本吹き飛ばす。

学園都市の最先端技術を使っているとは言え、本来俺の銃に銃を破壊するほどの威力は無い、だが俺の能力『電撃使い（エレクトロマスター）』を使い威力を挙げている、その結果がああ威力だ。

正直電撃を放つより効率がいい。

一方、銃弾を受けたターゲットは痛みのせいか手を抑えて苦しんでいる。

早く仕事を終わらせてしまいたいがいいつからは聞き出さなければいけない情報がある、まだ殺す訳にはいかない。

面倒なことだがお仕事の内容には他の内通者や取引相手などの情報を集めることも含まれている。

さてと、さっさと仕事を終わらせますか。

S i d e ターゲットの科学者

信じられなかった。

科学結社から情報を買ってくれと連絡があつてからまだ一日程度、こんなにも早く統括理事会にばれるなんて。

夜10時過ぎまで残って私は科学結社に求められた情報を、コーヒを飲みながら探していると、警備の人間しかいないはずの研究所

の扉が開き、160センチ後半くらいの背の高さで、茶髪の少年が入ってきた、しかもその手には銃を持っている。

驚いて口に含んでいたコーヒーをおもわず吹き出してしまった。

そこに少年に「悪いけどこれも仕事なんだ、悪く思わないでくれよ。」などと言われたので敵だと判断し、いざと言うときのために購入していた銃を慌てて構えようとするが、

パシュツ！！

という音とともに私の指ごと銃を吹き飛ばし、破壊してしまう。

殺される…嫌だ！まだ死にたくない、そう心の底から思うが少年は私を蹴り倒し、無常にも頭に銃を突き付ける。

「お願いだ。なんでもするから命だけは助けてくれ。」

気が付いたら私は中学生程度の少年に対してみつともなく命乞いをしていた。

「じゃあさ、アンタの知ってる科学結社の情報か他の内通者の情報をよこしなよ。」

助かりたい一心で私は知っている全ての情報を話したが、少年は私に向けて手をかざし、

「うっ、がああああああ！！」

焼けるような激しい痛みが全身を襲った。

「俺の能力でアンタにマイクロ波を照射した。科学者なら威力を上げられるとどうなるかわかるだろ？さっさと全部知ってること話せよ。」

一瞬何を言っているか理解できなかった、私はこれ以上何も知らない。

だが知らないと言っても少年は信じず、私の体を徐々に温度を上げながら何度も加熱してまた同じ質問をする。

「知っていることは全部話した！本当だ！信じてくれ！」

「ふん、どうやらマジで知らないみたいだな。」

少年は興味なさそうに私を見下ろしながらそうつぶやいた。

指は吹き飛ばされ、何度もマイクロ波を浴びて加熱された私の体はもうすでに限界に達している。

だから私は少年のつぶやきを聞いたときはやっと助かると安堵したが、それは非常に甘い考えですぐに現実を突き付けられることになる。

「さて…もう用は無いな、じゃあ殺すか。」

「な、何を言っているんだ？た、助けてくれるって言ったじゃないか。」

身も凍るような壮絶な笑みを浮かべて

「うん、それ無理。」

そう一切の容赦もなく言い放った。

嫌だ！死にたくな…

パシユツ！！

仕事を終えて終了の報告をいつも指令とか出してくる電話の相手に連絡し、外で待機させている下部組織の連中が来るのを待ちながら俺たちのリーダーに連絡を入れる。

実はこの仕事別件があるというリーダーから頼まれた仕事なのだ。

「もしもし、お疲れ様です。頼まれていた仕事終わりました。」

「摂津か、代わりに悪いな今別件で立て込んで「お待たせ垣根君。」「チッ…タイミング悪いな。」

気のせいじゃなければ電話の向こうから女性の声が聞こえたよな。

全然立て込んでないじゃん！そもそも別件ってデートのことかよ！
確かに俺たち『スクール』のリーダー『ダークマター未元物質』垣根帝督はとにかくモテる。

前に見たときは食品関連の施設が多く並び、ほぼ世界中の料理が楽しめる第四学区の有名レストランで女性と食事していたし、別の日には学園都市最大の繁華街がある第十五学区で数人の女性を連れて歩いているのを見かけたことがある。

「今からデートですか？飯に行って、映画とか行って、最後はホテルって訳ですか？」

「いや、すでにホテルだ。」

つまり俺がお仕事してる間、垣根さんはデートだったって訳か…なんかやってられないよな。

「あんまり待たせたくねえから切るぞ。」

え？いや、ちょっと待って…切られた！！

結局俺は垣根さんに仕事の詳しい報告をできないまま自慢のような状況を聞かされた後電話を切られ、ターゲットの死体の横で呆然とするしかなかった。

そもそも人に仕事任せてなにやってんだよ！

「ふざけんな！リア充は爆発しろ！」

この怒りを銃弾と言う形で死体にぶつけて、
頭が潰れたトマトみた
いになったことは仕方ない事だと俺は思う。

第一話（後書き）

このような駄作を読んいただきましたありがとうございます。

第二話

六月下旬

日も傾き、夕暮れと言つ言葉が相応しい時間帯になつてきたころ、今俺がいるのは第七学区の繁華街からちよつと離れた通り。

「おいおいテメエら、ずいぶんと楽しそうじゃねーか。ちよつとオレらと付き合えや。」

「そんなガキじゃなくてオレらと遊ぼうぜ。」

そんなガキとは失礼な奴らだなこの野郎。

俺こと摂津京輔とある少女は今、面倒くさい事にいきなりからんできたスキルアウト達に囲まれている訳なんだが。

「面倒ね。さつさと全員殺しましょうか。」

いやいや、殺すだなんて物騒すぎるだろ！もつと穏便に済ませようや！これだから変わり者は困る。

「おいおい相手は一般人だぞ、せめて半殺しで済ませとけつて。」

これなら誰も死ななし、実に平和的な解決手段だろ？

ちなみにどうしてこんなことになっているかと言つと、その理由を語るには俺の今日の一日を少し語る必要がある。

「だから今このスイーツが熱いのよ。」

いきなり俺ん家に押しかけ、スイーツの雑誌を机に広げて、寝起きでまだ頭の働いていない俺に対して熱く語ってくる小柄でウェーブの茶髪の少女が目の前にいる。

ちなみに今日は土曜日で、今の時間は朝の九時過ぎ。

ありがたいことに俺をこんな時間に起こしてくれやがったこいつの名前は和泉アリサ。

俺ん家に来た理由は何かというと

「という訳で今からこのケーキを食べに行くのに付き合ってちょうだい。」

なんで俺が行かなくちゃいけないんだ？正直俺は昼前くらいまで寝たい。

「なんで俺なんだよ？誰か学校の友達を誘えばいいだろ？」

「ここをよく見て。」

そう言いながらアリサは机に広げた雑誌の一か所を指さす。

特別企画！カップル限定レアチーズケーキセット 1200円

なるほどな、俺を誘いに来た理由はわかった。

非常識にも土曜の朝から人を叩き起こしてくれるバカ女だが、あまり信じたくはないが、なかなかいい学校に通っており、アリサの通う学校は常盤台と同じ学舎の園にある。

学舎の園とは五つのお嬢様学校の共用地帯での名前で、そこには女子校しか存在しない。

つまりアリサが通っているのは女子校って訳で、男子と知り合う機会はあると無いんだろう。

「つまり今日一日付き合ってるフリをしろってのか？」

「あら、理解が早くて助かるわ。」

キラキラ目を輝かせて俺を見やがって、ああもう！断りづらいな！

「しょうがねえ。今日だけだからな。」

S i d e 和泉アリサ

午前十一時過ぎの第七学区の繁華街

その繁華街の中にある最近注目のカフェで紅茶を飲みながら、余韻に浸っていると

「あのレアチーズケーキあっさりしてて、なかなか美味しかったな。わざわざ来たかいがあった。」

確かにケーキは美味しかったし、紅茶との相性もよかったかな？でも結構待たされたのは特別企画中だからって減点ね。

「私としては70点くらいだけど、そう言ってもらえたなら誘ったかいがあったわ。」

私の分の代金も京輔に払わせて、休日と特別企画が重なり混雑している店を出てお互いの感想を言っていると、

「アリサに男友達がほとんどいないことはだいたい想像できてたけど、少しはいるだろ？なんで俺を誘ったんだ？」

京輔のバカが財布の中身を見ながらこんなことを聞いてきた。

若干涙目だったのは私の気のせいだとできれば思いたい。

それにしても京輔はホントに女心がわかってないわね。

俺よりもつと金持つてる奴誘えよと言いたいんだろうが、私の知り合いの男の中だとそういう奴はクズばかりで、京輔が一番まともだったから選んだ訳だけど、なんか調子に乗りそうだから言いたくない。

大体私みたいな美少女とデートできるだけでも感謝して欲しいものだけど、たぶん京輔にその自覚は無いんでしょうね。

「フフツ。私が知っている人の中で京輔が一番暇そうだったからよ。」

「ひどっ！！ストレートに言いすぎだろ！アリサが俺をどう思ってるかよくわかったよ。」

「そんなことよりもさ。せっかくだしちょっと買い物に付き合っ
てよ。」

幸い荷物持ちもいることだしね。

そしてアリサの買い物に付き合い、いい感じに日も沈んできたから夕飯食べて帰ろうと話していたところで話は冒頭に戻る。

「私今日バイトだから早く帰りたいのだけど。」

実家は普通の家だが能力のおかげかお嬢様学校からお誘いが来たらしい、学費はかからないらしいが、学舎の園での生活は金がかかるらしくキャバ嬢のようなバイトをしている。

髪の色を変えたり、髪型をセットしたり、化粧をしたり、色々時間がかかるらしい。

俺にはよくわからん世界だ。

時間が無くなっていているせいか、イライラし始めた。

「ちょっと。私に触らないでちょうだい。」

そんなイライラしているアリサにスキルアウトの一人がなれなれしく肩に手を置いたところで事態が動く。

手を置いた後ろの男に対して振り向きざま股間に膝蹴りをお見舞いし、悶絶する男の顔面に蹴りを放った。

今日のアリサの服装はデニム、もしスカートだったなら見えていただろう。

見ていたら俺もたぶんあの男と同じ末路かな？

そんなことよりも周りのスキルアウト達の態度が一変したみたいだ。

「このクソ女何しやがる！ テメエら許さねえぞ。覚悟はいいよな？」

あゝあゝ… もつと面倒なことになってきたな、殴りかかってきた男を
躲し、反撃に電撃を放ちながらしみじみと思う。

俺は暗部組織『スクール』に所属していて多少場数も踏んでいるけど、殴り合いはあまり得意じゃない。

と言ってもこれくらいのチンピラ五人程度になら余裕で勝てる自信がある。

二・三人氣絶させてアリサの方を見るとすでに二・三人倒していて、他のスキルアウトと対峙している。

まあ、アリサならこれくらい朝飯前だろう。

学舎の園にある女子校に通っているアリサだが、実はこう見えて『スクール』の構成員の一人だ。

それに俺より殴り合いは強い。

スキルアウトの男はアリサを殴ろうとするが、何故か躊躇ってしま
い殴ることができないでいる。

理由は簡単、アリサの能力だ。

『メジャーハート
心理定規』

アリサが言うには『テレパス念話能力』の応用と勘違いされやすいが、『サイコメトリー読心能力』の一面もあるらしく、人の心を観測し心の距離を自在に調節できるらしい。

たぶん今戦っているスキルアウトの心の距離を親しい人と同じくらいに縮めて攻撃できないようにしているんだろう。

敵に回したくないえげつなさ溢れる能力だ。

ハイキックを顎に決めて、あつと言う間にアリサはまた一人倒してしまう。

こつちも負けてられねえな。

だけど俺がまた一人気絶させ、スキルアウト達が残り少なくなってきたところで再び状況が一変する。

そいつは突然現れた。

『ジャッジメント風紀委員ですの。通報を受けて参りました。』

何の前触れもなく突然現れたツインテールに常盤台の制服の少女がジャッジメント風紀委員の腕章を見せつけるようなポーズで仁王立ちしている。

「やべえ風紀委員だ！！逃げるぞ。」

たった二人にボコボコにされ全滅しかかっている状況に突然の乱入者。

泣きつ面に蜂な状況のスキルアウト達は慌てふためき、気絶している仲間を抱えて逃走を開始しようとする。

風紀委員に捕まるとかマジで冗談じゃないし、いろいろとまずい。

「チッ！風紀委員か。俺らも逃げるぞ」

アリサにそう呼びかけるが既に姿はなく、スキルアウト達が逃げに行った方向とは別の方向に走って逃げていた。

あいつ俺を置いて逃げやがった！あり得ないだろ。

アリサは逃げ、スキルアウト達も逃げている、つまり残っているのは俺一人って訳で…

慌てて俺も逃げようとするが

「お待ちなさいな。」

俺の目の前にいきなり同じ風紀委員が現れる、ただし現れた位置は俺のやや斜め上空。

「テレポーター お前空間移動能力者かよ！」

空中にいる風紀委員の少女はそのまま俺にドロップキックをしてきた。

とっさにしゃがんでそれを回避する。

チッ！危ないな…電磁波のレーダーで早めに察知していなかったら

避けなかったぞ。

「あら？今のを避けられるとは思っていませんでしたわ。」

「生憎こっちも捕まりたくないんでね。」

そう言いながら俺は能力も使いリニアの原理でスピード上げて全力で逃走を開始する。

「逃がしませんわ。」

風紀委員の少女もヒュン、ヒュンと空気を切り裂くような音をさせ、『レポート空間移動』で俺を追ってくる。

チクショウ！なんかもう泣きそうだ。

この後、俺はなんとか逃げ切ったのだがバツチリ顔を覚えられていたため、結局お呼び出しされるハメになった。

第二話（後書き）

原作で出てきたドレスの少女をほぼオリキャラにして出してみました。

白井黒子も出してみました。が、原作キャラを書くのはやはり難しいですね。

第三話

七月上旬

昨日、統括理事会に反逆しようとした奴らを暗殺する仕事が入り、狙撃でターゲットを全員暗殺して仕事が終わったのは午前1時過ぎ。寝たのは夜中の三時前だったので午前中の授業はほとんど寝て過ごしている。

残念ながら今日は平日なので学校をサボって一日中寝ていたかったが、いつも朝起こしに来る友達がいるのでその願いは叶わなかった。待望の昼休みになり、机だほとんど寝た気がせず、少しの時間でもいいからゆっくり寝たかったので昼飯を食った後、屋上の日陰で横になり寝ることにする。

ここ三・四日雨が続けていたが、梅雨の時期にしては珍しく風は強いけど晴れで、昼寝には丁度いい天気だ。

それではおやすみなさい。

数時間後

「京輔起きろ。もう授業始まってるぞ。」

目を覚ますとそこには黒髪のショートカットが似合う少女が俺の側に立っていた。

名前は河内茜。

俺の昔からの友達で俺のクラスの委員長もやっているが、それだけじゃなく風紀委員もやっていて、その活躍ぶりから『柵川のエース』と呼ばれるている。

六月下旬に風紀委員のお世話になった時にお説教されたが、あの時の茜は阿修羅すら凌駕する恐ろしさだった。

ちなみに毎朝起こしに来るのも茜だ。

「おはよう。今何時？」

「おはよう。もう三時前だ。」

三時前って二時間ちよつとくらい眠れたな、まあ…授業をサボることになったのはある意味仕方ないことだよな。

そう自分に言って納得している。

「ほら。早く教室に戻るぞ。」

まだ頭が働いておらず、ボーっとしている俺を起こそうと手を差し出してきたところで事件が起きる。

今日は晴れているが風が強い日で、今いる屋上は風がよく通る。

そんな状況で突風が吹くとどうなるか？

答えは簡単だ。

「へえ。白か。」

茜は顔を真っ赤にしながら

「わ、忘れる！」

差し出していた手を振りかぶり、俺の頬をおもいきりひっぱいた。

「あべしつ。」

なんで俺が叩かれなくちゃいけない？ 確かに見たけど見たのは不可抗力だろ。

放課後

クラスメートの連中と学校の近くのファミレスに寄って、ジュースを飲みながらバカな話をしていると俺のケータイが鳴る。

ケータイを取り出してみると見覚えのある番号からの電話だった。
で急いで出ると、やっぱり仕事の電話だった。

今回の仕事は最近起きている連続女子誘拐事件の犯人を捕まえること。

こういう仕事は風紀委員と警備員アンチスキルの仕事で、暗部組織の『スクール』に回ってくるような仕事じゃない。

なんで俺達にこんな仕事が回ってきたか不思議に思いながら、用事が入ったと友達に言ってファミレスを出る。

だが、みんなと別れて『スクール』のメンバーと合流する途中でまた電話がなった。

「もしもし。またお前に一働きしてもらいたいんだけど。」

雲川芹亜。

表では第七学区の高校に通う高校生だが、裏では統括理事会の理事の一人の貝積継敏のブレインを務めている才女である。

そんな人が何故俺と付き合いがあるかというと、以前雲川さんがガラの悪いお兄さんたち（スキルアウト）にからまれているところを偶然通りかかった俺と友達が助けたのが切っ掛けだ。

それ以来雲川さんの個人的な依頼を受けたり貝積さん絡みの仕事を受けていたりして、その変わり後ろ盾になってもらったり知恵を貸してもらったりと、ギブアンドテイクな関係である。

ちなみに俺と貝積さんに直接的な面識はない。

「さっき仕事の連絡があったと思うけど、お前にはもう一仕事あるから。」

つまり連続女子誘拐事件に俺達暗部を動かすような事態が起きたって訳か。

「つい十分くらい前に下校中の貝積の孫が攫われたから。お前には最優先で貝積の孫を保護してもらうけど。」

貝積さんの孫が誘拐されたのか、個人的な事情で暗部を働かせるなんて孫が心配なお爺ちゃんって訳か。

そもそも妻と娘がいることは知っていたけど、貝積さんに孫いたんだ。へえ知らなかった。

「名前は播磨雫。小学六年生。本人の画像は後で送るから。」

貝積さんの孫を攫うなんて、目的は身代金か？それとも上層部への圧力か？

「まさか今までの連続誘拐事件はダミーで今回が本命って訳ですか？貝積さんを邪魔に思う奴らの差し金なんですかね？」

ドラマとか映画とかでありそうな展開だな。不謹慎だけどなんだか面白くなりそうな気がする。

「勝手な妄想を膨らませているところ悪いけど、誘拐されたのは偶然だから。」

ぐ、偶然…だと？

じゃあ敵対組織との銃撃戦や激しいカーチェイスとか、海外の連続ドラマや映画でやる手に汗握るような展開には期待できないのか？

最近狙撃で暗殺する仕事ばかりでストレスが溜まってきているから、たまにそういうのに憧れてしまう部分もある。

ま、実際やれと言われるとやりたくないけど。

「それじゃあ、いつも通りに後は任せるけど。」

いつも通り、つまりは他言無用ということ。

それは他の『スクール』の連中にも内密にしろということだ。

もつとも、上層部と繋がりがあるなんて垣根さんの耳にでも入ったらタダじゃすまないだろうから、もちろん黙っているつもりでいる。

「厄介な仕事だけどやるしかねえか。」

『スクール』のキャンピングカーで他の連中と合流し、これからの行動について話し合う。

全員学校帰りのせいだ制服だ、他から見たらタダの仲のいいお友達集団に見えるかもな。

「俺達『スクール』の仕事じゃねえが、まあ…さつさと終わらせようぜ。まずは下部組織からの調査結果だ。」

調査の結果犯人グループのスキルアウト達はワゴン車を所持し、それを使い誘拐を行っているらしい。

そして誘拐された女子たちは第七学区に数か所あるアジトのどれかに集められているようだ。

この短時間でここまでよく情報を集めたもんだ、流石は暗部。

「じゃあ俺はバイクでワゴン車探します。」

この情報を踏まえて俺たちは動き出す訳だが、俺はバイクでワゴン車の搜索と追跡を買って出た。

これは貝積さんの孫の救出を優先しているだけじゃ無く、『スクール』の主要メンバーの中で車やバイクの運転ができるのは俺だけという理由がある。

垣根さんはリーダーらしく俺達からの情報を収集したり、全員への指示。

アリサともう一人の主要メンバーの丹波真人^{たんば まこと}は女子たちが捕まっているアジトの搜索。

下部組織の連中は主要メンバーのサポートである。

「よし。じゃあ全員行動を開始しろ。」

垣根さんの合図でみんな装備を整えるなどそれぞれ動き始める。

「私今日バイトだからさっさと終わらせてね。」

横に立ったアリサが銃のチェックをしながら俺に話しかけてくる。

「また小遣い稼ぎにエロいことかよ。」

「だからエロいことはしないって言ってるじゃない。まあ場合にもよるけど。」

場合にもよるとか言っているが、アリサのことだから“こいつにならいい”とか思わない限り無いだろうな。

無理やり抱こうとしたら玉を蹴りつぶされて男として終わりそうな気がする。

そもそもエロいこと目的なら特殊な趣味の人以外残念なスタイルのアリサは呼ばないだろう。

「まあ、エロいこと目的ならもつとスタイルいい奴を呼ぶだろうか
らな。」

アリサの胸を見ながら冗談っぽく言ってやったら

「うるさいわよ。」

言つと同時に、まったく躊躇いもせず俺の股間を蹴り上げた。

「やっぱり胸か？胸なのかこの野郎！？」

アリサは自分の胸を押さえながらキレていたが、股間を蹴り上げられた俺はそれどころじゃないんだよ。

女には一生この痛みは分からねえだろうな。

話し合いが終わった直後から俺はバイクで第七学区内にいるらしい犯人グループ達のワゴン車を探す、なかなか見つからない。

そこに垣根さんから連絡が入る。

「下部組織の連中からの報告だ。犯人グループのワゴン車が学舎の園近くの公園の側で目撃された。今すぐ向かえ。」

「了解。」

連絡を受けワゴン車が目撃された公園に向かうと、そこは大通りの近くだけとあまり人がいない公園だった。

人数が少ないせいでスキルアウト達には犯行がやりやすいみたいで、無理やり常盤台の女子をワゴン車に連れ込もうとしているのが遠くから見える。

「チツ。くそ野郎！やらせるかよ。」

貝積さんの孫がまだ車に乗せられている可能性はあるが、スキルアウト達を足止めするために、俺から狙える後ろのタイヤを狙って銃を撃つ。

でもバイクで走りながら撃ったせいかタイヤには当たりもしない。

俺の銃はコイルガンだが多少発砲音はするし、銃弾が物に当たった音もする。

その音に気付いたのか慌てて少女をワゴン車に積み込み、車に乗りながらスキルアウト達は俺に向けてそれぞれが持っていた銃を撃ってきた。

ふざけやがって！だけど俺には普通の銃は効かないんだよ。

次々と俺に迫ってくる弾丸の軌道を磁力で変えていく。

こっちも銃を撃ち反撃し、まだ車に乗り込んでいない奴の腕を掠る。

捕まえるのが仕事だけど、ただでさえ当たり難いのに体や頭を狙えないのは面倒だな、でも手足狙わないと殺してしまう可能性がある。撃たれた仲間もワゴン車に乗せて慌てて車を急発進させるが、もう少しで俺が追いつけそうだ。

けど、

「グ、グレネードランチャー!?」

ワゴン車の窓からこちら向けられている銃はグレネードランチャーだった。

クソツタレ!なんでスキルアウトがそんな物騒な得物持つてるんだよ!

さすがに運転しながらじゃあ演算に集中できなくてグレネードランチャーを防ぐほどの能力は出せない。

俺はバイクを止め高周波を短いサイクルで放ち、発生する振動波をバリアの様に使ってグレネードランチャーでの攻撃から自分をガードした。

ちなみにこの使い方は昔見たとあるアニメを参考にしている。

スキルアウトからの攻撃を防いでる間にもワゴン車はスピードを上げどんどん離れていく。

「クソツ!そう簡単に逃がすかよ。」

慌ててバイクを発進させようとしたところに

「待って！お願い私も連れて行って。」

声をかけられたのでそつちを向くと、走って来たのか息を切らせたやや茶色の髪の常盤台の生徒がいた。

「あんたあいつ等追ってるんでしょ？連れて行かれたのは私の友達なの。」

連れて行かれた友達が心配ってわけか、お人よしだな。

連れて行ってもいいけど足手まといはいらない、でも常盤台の生徒ってことは最低でもレベル3以上あるから銃撃戦にでもなった時は弾除けくらいにはなるかな？

「しょうがねえな。その代り自分の身は自分で守れよ。」

そう言いながら自分のとは別のヘルメットを渡す。

ありがとうと言いながら俺の後ろに乗ったので、俺はワゴン車が逃げた方向にすぐにバイクを発進させた。

「それにしても度胸あるな。さっきの銃撃戦見てなかったのか？」

「もちろん見てたわよ。でも友達が攫われたのよ？黙っておけないじゃない。」

これが女は度胸ってやつか？いい根性してやがる。

「はっ！気に入ったよ。俺は摂津京輔だ！よろしく。」

「私は御坂美琴。よろしくね。」

第四話

Side 御坂美琴

私、御坂美琴は今日の昼休みに同じ寮の友達と、学校が終わってから第七学区の繁華街に買い物に行く約束をしていた。

普段は寮の同じ部屋の後輩の白井黒子とよく行動してるけど、最近黒子は風紀委員の仕事“連続女子誘拐事件”の捜査で忙しいらしい。放課後になって待ち合わせ場所に指定した学舎の園近くの公園に向かうと、スキルアウト達が友達にからんでいるのが見える。

電撃で少し脅して追い払うか…なんて考えながら歩いていたら、ワゴン車に友達が無理やり連れ込まれようとしていた。

ちよつと冗談でしょ？お願い間に合つて！

まだワゴン車まで結構距離があるから走って助けに行っていたら、スキルアウト達が慌てて銃を取り出してある方向に向けて撃ち始める。

その方向をよく見るとワゴン車に向かって中型くらいのバイクが走って来ていた…ただ普通と違うのは運転手の男も銃を撃っていたことだ。

は？こんな街中で銃撃戦？いや…それよりバイクの男は助けようとしてくれる？

バイクの男は私と同じ系統の能力者みたいで、磁力で無理やり弾丸の軌道を変えて銃弾を躲しているのがわかる。

能力をあんなふうに使って躲すなんて結構無茶苦茶な奴ね。

だが急いでワゴン車に向かう私が見たものは、バイクを狙う大きな武器だった。

「危ない！」

防ぎきれないと思って思わず叫んでしまうが、バイクの男はバイクを止めて銃を持っていない方の手をワゴン車の方に向けると、スキルアウトの撃った弾丸どころか爆風も防いでしまう。

今のは高周波？短いサイクルで放射することで強力な振動波を生み出して盾にしたの？珍しい使い方するわね。

私はスキルアウトの足止めを受けて、発進が遅れているバイクの所にやっとたどり着く。

「待って！お願い私も連れて行つて。」

声をかけられて私の存在に気が付いたみたいで、バイクの男はこっちを向いた。

フルフェイスのヘルメットじゃないからその顔を見れたけど、結構若そうね。

「あんだあいつ等追ってるんでしょ？連れて行かれたのは私の友達

なの。」

一瞬“なんだこいつは？”みたいな顔をされたけど、少し考えた後

「しょうがないな。その代り自分の身は自分で守れよ。」

そう言いながら自分のとは別のヘルメットを渡してきた。

急いでヘルメットをかぶり、ありがとうと言いながら私は男の後ろに乗ると、男はワゴン車が逃げた方向にすぐにバイクを発進させた。

「それにしても度胸あるな。さっきの銃撃戦見てなかったのか？」

「もちろん見てたわよ。でも友達が攫われたのよ？黙っておけないじゃない。」

街中でいきなり銃撃戦始めるアンタらの非常識ぶりもしっかり見たわよ。

「はっ！気に入ったよ。俺は摂津京輔だ！よろしく。」

「私は御坂美琴。よろしくね。」

摂津京輔か…悪い奴じゃなさそうね。

「お前がああ『常盤台の電撃姫』ねえ。正直撃ちあいになった時の弾除けくらいにしか考えてなかったけど、戦力として期待させてもらうよ。」

前言撤回…こいつろくでもない奴だ。

「あんた結構若いみたいだけど、免許持ってるの？」

顔を見たときに湧いた疑問を思い出したからぶつけてみると

「それでも俺中二だよ。免許なんか持つてるわけないじゃん。」

アハハハハと軽く笑いながら言いやる。

なんだ同年なんだ…ってそうじゃない！無免許！？冗談じゃないわよ！！

「嘘でしょ？なんでバイクなんか運転できるのよ？」

ハア…ってワザとらしく大きな溜息をつき

「わかってないな。運転に必要なのはカードじゃなくて腕前なんだよ。」

やれやれと言いたげな感じで言う。

わかる訳ないでしょ！

「そんなことより奴らのワゴン車が見えた。腹くくりなよ。」

いよいよね！絶対に助けてみせる。

摂津はバイクをさらに加速させ、ワゴン車の斜め左後ろに近づける。スキルアウト達が気付いて攻撃してくるよりも早く摂津が銃を撃ち、

左側二つのタイヤをパンクさせる。

車はしばらく走るがパンクのせいかまともに走れず、道路脇の街路樹に激突してしまう。

ワゴン車の側にバイクを止めて様子をうかがっていると、怪我した男たちが手を上げながら出てきた。

あいつらも降参しているみたいだからこれで終わ리と思っていたが、摂津は降りてきた男たちの足を銃で撃ちぬき、さらに電撃を浴びせて意識を奪っていく。

「ちょっとやりすぎでしょ！」

相手が誘拐犯だからっていくらなんでも可哀そうよ。

「なに甘いこと言ってるんだよ？こつ見えてこいつ等油断できな…御坂危ない！」

えっ！？

振り返つて見るとワゴン車の陰から出てきた別のスキルアウトが大型の銃を構えていた。

ヤバい！何か磁力で操れて盾になりそうな物は…無い！

咄嗟にさっきの摂津と同じように高周波を短いサイクルで放ち、振動波の壁を作る。

スキルアウトの放った弾頭は振動波の壁に当たって炸裂するが、振

動に阻まれて爆風も衝撃も私まで来なかった。

能力の効率は良くないけど盾になりそうなものが無いときは役に立ちそうね。

そんなことを考えながら私を撃ってきたスキルアウトを雷撃の槍で気絶させる。

「さすがは『超電磁砲』^{レールガン}。さっき俺がやったのを見ただけでできるのか…へこむな。まあ、いいや。それより誘拐された人を助けに行くぞ。」

ワゴン車の中を覗くと縛られた女子が二人乗せられていた。

一人は私の友達だけでもう一人は誰だろう？

私は友達のロープを解き、摂津がもう一人の女の子のロープを解いている。

「もう大丈夫よ。」

その声をかけると友達は泣き始めてしまった。

「すまん。この子も頼む。」

友達を落ち着かせている私にもう一人を預け、車の外に出て誰かに連絡を取り始める。

「お疲れ様です。目標の救助に成功しました。この後どうしますか？^{アンチスキル}警備員にですか？了解しました。スキルアウトはどうしますか？

わかりましたいつも通りで。」

摂津は電話を切ったが、また別の誰かに電話をかけ始める。

「摂津です。ワゴン車の方終わったんでスキルアウト達の回収お願いします。えっ？アジトが分かった？すぐに向かいます。」

なんか物騒な会話に聞こえるわね。

そもそも摂津って何者なの？風紀委員にしては乱暴すぎるし、風紀委員は銃なんて持っていない。

じゃあ別のスキルアウト？これはスキルアウト同士の抗争なの？

いや…そこそな強さの能力を使っていたからその可能性もあまりない。

こいつの正体は一体何なのよ？

本人に聞いたですか。

「この子助けてくれたのは感謝してるけど、あんた一体何者なの？」

「答えてやりたいけど、行かなきゃいけない所があるからまたな。」

私の質問に摂津は答えず、バイクでさっさと走り去ってしまった。

その直後

「アンチスキル警備員です。ご無事ですか？」

別の方角から警備員がやってくる。

「こいつらが犯人ですね？よしお前ら回収しろ！」

警備員達は気絶しているスキルアウト達を次々と護送車に積み込んでいく。

「ちょっと待って下さい。この子達はどうするんですか？」

誘拐された二人には構わず作業を続ける警備員に文句を言うと

「もう少し待ってくれ。もうすぐ事情聴取をする部隊がやってくる予定だ。」

そう言い残し警備員達は去って行った。

だが

「お姉様ー！！ご無事ですか！？」

黒子達風紀委員が警備員と一緒に現れる。

さっきの警備員達の言った通りすぐ来たわね。

これでこの子達も一安心ね。

「お姉様、犯人は何処ですか？」

「犯人たち？さっき警備員の人達が連れて行ったわよ。」

そう伝えるけど一緒に来ていた警備員の一人がそんな報告は受けていないし、この周辺に私たち以外の警備員はいないと言う。

じゃあさっきの警備員達は一体何なの？

そういえばさっきの警備員はスキルアウトを連れて行くときに回収って言ってたわね。

摂津はスキルアウトを回収するように誰かと話していた。

それじゃあさっきの警備員は摂津の仲間なの！？

「黒子！さっきここから走り去ったバイクの行方を調べてちょうだい。早く！」

第五話

Side 垣根帝督

学校も終わって街が学生でにぎわい始める時間帯。

このくらいの時間は俺も学校帰りに女とか誘ってカラオケ行ったりして遊ぶに限る。

だが、俺達『スクール』の四人は第七学区の寂れた区画の路地裏にある五階建ての廃ビルの近くに集合していた。

「さて、ここが犯人共のアジトってわけらしいが、どうしてここに誘拐された少女たちが集められてるってわかったんだ？」

ここを調べていた和泉の方を見ると

「外から中の様子を観察して誘拐された女子の姿が確認できたのよ。後、近くにいたスキルアウト達から聞き出したの。」

まあ、この女のことだから聞き出すのに銃を使ったか、拳で語ったかのどっちかだろうな。

それはさて置き、和泉の得た情報によると廃ビルの出入口は正面と裏口の二か所、女子たちは四階に集められて、犯人たちは二階のデカイ部屋でたむろしているらしい。

さっさと作戦を決めてこのめんどくせえ仕事を終わらせるか。

「俺と和泉が突入して犯人共を制圧と捕まってる奴らの救出。摂津と丹波は周囲を警戒して一人も逃がすな。摂津は可能なら狙撃して制圧の援護もやれ。銃や弾薬は下部組織の奴らから受け取っておけよ。」

さて、全員準備完了したみたいだし仕事を始めるか。

「行くぞ。」

俺と和泉は廃ビルの正面入り口から入って行き、摂津が正面入り口を固め、丹波が裏口を固める。

ネズミ一匹逃がしはしねえ。

一階に誰もいないことを確認した後、俺は上へと続く階段を上りながら和泉に話しかける。

「俺は二階をやるからお前は四階をやれ。俺は四階に行かない方がいいだろうからな。」

女ばかり誘拐したってことはそういうことが目的なんだろう。

四階はモテねえくそ野郎共のせいでロクでもねえことになってるに違いない。

「わかってるわ。私が四階をやる。」

和泉も理解していたみたいで、顔が若干怖い。

依頼内容は捕縛だから殺しだけはするんじゃないぞ。

報酬が減っちゃう。

「それじゃあ四階は任せたぞ。」

二階に着き、和泉に声をかけると了解と言い、足早に階段を上っていく。

俺は情報にあった二階の一番デカイ部屋に入って行くと、その部屋にいた10人くらいのスキルアウト共がこつちを一斉に睨みつけてくる。

そんなアホ共に向かって俺はわかりやすく目的を伝えた。

「よう teme いら。全員ぶち殺しにきたぜ。」

S i d e スキルアウト

「あいつら遅えな。」

新しい女を誘拐しに行った奴らがいつまで経っても帰って来ないし、

連絡しても全員のケータイと一時間くらい前から繋がらない。

「まさか警備員にでも捕まったか？」

仲間のひとりがそんな冗談を言うが、その可能性も否定できない。

まあ、あいつらの事だから俺らの情報は売らないだろう。

それより心配なのは駒場の野郎達の動きだ。

俺達は駒場に逆らってこの事をやってるからやつらに襲撃されるかもしれない。

まあ、駒場たちを監視させている仲間から連絡が無いから大丈夫だろう。

その後仲間と上の階にいる女達の話をして、新しい女が来るのを待っているけど、やって来たのはホストっぽい茶髪の男だった。

俺らが睨みつけてやるけど男はまったく気にしていない様子で

「よう teme 兄。全員ぶち殺しにきたぜ。」

なんて言いやがった。

なんだこのふざけた馬鹿は？調子乗ってんじゃねえよ。

とりあえずボコってやろうと、部屋にいた六人で男を取り囲むが、俺達は目に見えない何かをぶつけられて吹き飛ばされる。

痛つてえな！こいつ能力者か？

「クソツタレ！テメエ『念動力者』か？おい！全員出て来い！」

「あん？俺はこの世には存在しない物質をぶつけたただけだ。念動力なんかと勘違いしてんじゃねえよ。」

この世には存在しない物質？訳がわかんねえ事言つてんじゃねえよ？

立ち上がり、他の部屋から仲間たちが集まるのを待つ。

するとすぐに銃や鉄パイプとか自分の武器を持った仲間がぞろぞろと部屋に入ってくる。

全員で15人か…15人もいるんだ。楽勝だろ。

でも、この男は予想を遥かに超える化け物だった。

男は手から白色の光を放ち、次々と仲間の腹や手足に穴を開けて、戦闘不能にしていく。

俺達も反撃に銃を撃つけど、こういう原理が傷一つもつけることができない。

不利だと思って階段から一階に逃げようとするやつがいたけど、もちろんこの男が逃がしてくれるわけがなく、逃げだした奴は片足を吹き飛ばされてしまった。

あまりに圧倒的な状況に仲間の一人がパニック状態になって、窓から飛び降りて逃げようとするけど

「うわぁあああ！痛い…痛いいいい！！」

窓際から吹っ飛ばされ、太腿から血を流して倒れる。

この男の攻撃かと思っただが、

「摂津の奴、また腕を上げたか？」

どうやらこいつの仲間の仕業らしい。

クソッ！！これじゃあ窓から逃げられねえじゃねえか。

畜生…：こうなりやあーか八か

「うおおおお。」

俺は覚悟を決めて、ナイフを構えて奴に突撃した。

「ここみたいね。」

偽警備員に連れて行かれたスキルアウト達の行方を知っていそうな摂津の行先を調べるため、私は手持ちの携帯端末で、黒子は知り合いの風紀委員に協力してもらって調べたけど、摂津は街中の監視カメラのコントロールを奪っているみたいで、映像にダミー映像を流したりしてなかなか尻尾を掴ませない。

だけど私の能力と黒子の知り合いの風紀委員の力を借りて、監視カメラのコントロールを奪いかえして摂津の行先をカメラの映像で調べると、第七学区の中でも寂れた区域の路地裏に入って行くのが確認できた。

すぐに黒子と摂津の後を追ひ、入って行った路地裏に入るとすぐにスキルアウト達がからんでくる。

電撃をお見舞いした後、監視カメラに映った摂津の画像を見せてどこに行ったか聞くと、もう少し奥に行った廃ビルの近くで見かけたらしい。

その情報を信じて奥に進んでいくと

「垣根さん！手足はともかく腹にまで穴開けるなんてやり過ぎですよ。まあ…全員無事回収したみたいですし、さっさと帰りましょう。」

「あのくらいじゃ死なねえよ。学園都市の医療技術舐めすぎだ。」

数台の大型車の側で摂津が三人の男女と話をしていた。

私たちは四人の所に近づいて話しかける。

「摂津。あんたに聞きたいことがあるから、残念だけどすぐに帰るのは無理よ。」

摂津は振り返り、一瞬驚いた表情をしたがすぐ嫌そうな表情をしてこつちを見て溜息を吐く。

「おい摂津。どういう事だ？」

あの四人の中では一番年上で明らかにリーダーみたいな感じの男が摂津に尋ねる。

「すみません。上手く誤魔化したつもりだったんですけど……。」

「……お前報酬無しな。」

“報酬無し”と聞き明らかに落ち込みながら私を恨みの籠った目で睨みつけてくる。

自業自得なんだから私を睨みつけるのは間違っていると思う。

なんかム力つくから私も睨み返しているとリーダーみたいな感じの茶髪の男が私たちに話しかけてきた。

「ところでそちらのお嬢さんたち。ここ辺は治安悪いからさっさとお家に帰りなよ。」

あの男は私たちを甘く見てるみたいだけど、私はスキルアウトどころか大抵の能力者には勝てる自信があるし、黒子だって風紀委員で

場数踏んでいるから簡単にやられたりしない、そうじゃないと摂津を追ってこんなところまで来たりしないわよ。

一瞬電撃でもお見舞いしてあげようかと考えたけど、摂津よりあの男の方がリーダーならスキルアウト達がどこに連れて行かれたか詳しく知っていそうね。

「アンタがリーダーね。スキルアウト達をどこに連れて行っただの？」

「確かに俺がリーダーだけどさ、その質問に答えるわけねえだろうが。」

リーダーの男は私たちを威圧した後、待機していた大型車に撤収すると命令を出す。

逃げる気ね…逃がす訳無いじゃない、こいつらから情報を絶対に聞き出さないと。

「黒子。風紀委員と警備員に連絡してあいつら逃がさないで。」

「わかりましたわ。」

あいつらには聞こえないように黒子に連絡を頼んだ後、私は電撃の火花を頭から散らせながら

「答えなさい！それとも私の電撃をくらいたいのか！？」

とリーダーの男を脅す。

「なめてんのかコラ！？テメエみたいなガキの電撃が聞くわけねえ

だろ。」

なんかチンピラみたいな男ね。

「気を付けてください。こいつあの『超電磁砲』^{レールガン}です。」

摂津がリーダーに私について忠告しているけど、私の情報を知っているからって上条^{あいっ}当麻みたいに変な力持つてる奴なんて他にいないはずだから、こんな男が私に勝てるとは思えない。

「へえ。こいつがあの『妹達』^{シスターズ}の。」

『妹達』^{シスターズ}？なんか新しいアイドルグループか何かだろうか？そもそも私はアイドルグループとかに入った記憶はない。

「まあ、『超電磁砲』^{レールガン}だろうがなんだろうが、俺には勝てねえよ。」

言ったわね…無理やり聞き出してやるから。

「だったら私の電撃受けてみなさいよ！！」

私は電撃を掌に集めて相手目がけて放つ、放った雷撃の槍は煌めきながら空中を走り男に迫るけど、男は防ごうとしたり避けようとはせずそのまま直撃した。

やり過ぎたかな？まあ、他の三人から聞き出せばいいか。

だけど男は何事もなかったかのようにそこに立っていた。

「痛えな。そしてムカついた。」

嘘でしょ！？手加減したとは言え一発で気絶するくらいの威力はあったのになんで効いてないのよ？

「お前ら手出すんじゃないぞ。俺が殺る。」

男は痛がる様子もなく、こっちに手を向けると掌の前にバスケットボールくらいの大きさの白い何かの球を作ってこっちに高速で撃ちだしてきた。

ヤバイ！！

直感的にそう感じてとっさに白球を避けると、その白球は私の後ろに建っていた廃ビルに同じ大きさの穴を開ける。

何よ今の！？

さつき電撃はほとんど効果が無かったわね、それなら！！

周りに落ちていたり積んであった鉄パイプや鉄骨を磁力で操って男に投げつけるが、男は落ち着いて掌を飛来する鉄骨に向けると、一瞬掌が白く煌めくと凄まじい衝撃波が起きて鉄骨や鉄パイプを全て弾き飛ばす。

壁に穴開けたり衝撃波生み出したり、何なのよこいつは！？

「あんた何者よ？私の電撃が効かなかったり、壁に穴開ける白い球作ったり、衝撃波作り出したり、『念動力』かと思っただけど、常識的に考えて全部併せ持つ能力なんて聞いたこと無いわよ。」

「確かに常識的に考えるとそんな能力は存在しないかもしれないねえ。」

しかし男は勝ち誇った様な顔で「だがな」と続ける。

「俺の『^{ダークマター}未元物質』に、常識は通用しねえ。」

男の発言に私は一瞬思考が止まってしまったけど、すぐに思考を再開させる。

『未元物質』か…確かこの世には無い物質を作り出し操る能力だつて誰からか忘れたけど聞いたことがあるわね。

そして『未元物質』を持つ能力者は…

「ま、まさかあの殿方がレベル5の一人の。」

私の側で電話を掛けていた黒子は思わず携帯を耳から離して男のセリフに驚いている、やっぱり黒子もその結論に達するののか。

「あんたが第二位 垣根帝督。」

だから第三位の私に対しても強気でいたわけね。

でも、レベル5の序列は戦闘力や演算力じゃなくて能力研究の応用が生み出す利益だから私よりあの男が強いとは限らない。

それに同じレベル5なら手加減しなくてもいいわよね？

「それなら遠慮なく行かせてもらっわよ！」

私は10億ボルトにもなる電撃を掌に集めてもう一回あの男に向けて放つけど、今回は何もなかったあの男が今回は自分の正面に白く丸い盾を作り出す。

同じように空中を煌めき疾走する雷撃の槍は白い盾に直撃し、目も眩むほどの光を生み出す。

やったか？

そう思っていたけど、光が治まって視界が元に戻り私が見たものは何事もなかったかの様に立っている垣根帝督の姿だった。

「まさか俺の『未元物質』の盾を破壊するなんてな、流石は第三位なかなかのム力つきぶりだ。本気で潰してやる。」

そう言う垣根帝督の背中から白い何かが吹き出す。

数は六つ。

その形は翼。

それは天使のような六枚の翼だった。

「あんたにメルヘンな翼なんて似合わないわね。」

「うるせえ。これでも自覚はあるんだよ。」

さっきからあいつは白い物質を『未元物質』と言っていた。

それならあの翼は全部『未元物質』で出来ている？もしそうだとし

たらどれほどの力があの翼に含まれているのよ!?

垣根帝督は力が未知数の白い翼に力を籠めてこっちに対して衝撃波を放ってくる。

「きゃあ!」

あまりの衝撃に私と黒子は耐え切れず吹き飛ばされ、コンクリートの壁に叩きつけられてしまう。

「この程度でダウンしてんじゃねえぞクソ女!」

この男最低ね。

私は痛む体を無理やり立ち上がらせて、周囲の電子を直接操って集束し、加速させる。

そして磁場を操って電子が一直線の飛ぶように安定させ、十分に加速している電子を一気に垣根帝督目がけて放った。

「あんたみたいな男はこれでも喰らってなさい!」

翼に力を籠めもう一度衝撃波を放とうとしているが、迫りくる光を目の当たりにして

「チツ!まさか荷電粒子砲!」

翼で自分を包んで守りの態勢に入るが、私の放った電子の濁流は白い翼の繭を飲み込み、押し流していく。

押し流された白い翼の繭は廃ビルの側に積んであった瓦礫の中に突っ込んでいつて、その姿は瓦礫に埋もれて確認できない。

「黒子。風紀委員と警備員の応援はまだ来ないの？」

私は瓦礫の方を見ながら応援の状況を黒子に確認するけど黒子の表情は暗い。

「それが…風紀委員も警備員も応援は来ませんの。」

今のは私の聞き間違いよね？

「黒子。嘘でしょ？何で来ないのよ？」

黒子の話を聞くと風紀委員と警備員の間では『連続女子誘拐事件』の犯人が全員残らず逮捕されて既に解決しているらしい。

まだ捕まってないのに一体どうなってるのよ？

まさか摂津達が風紀委員と警備員の捜査に関する情報すら改竄して応援をこっちに送れないようにしてるって言うの？

「あんたたちの仕業なの？あんたたちが事件を終わったことになっているの？」

私は戦いを見ていた摂津たちを問いたただすように話しかけると、私の問いに対して口を開いたのは摂津だった。

「さて、何のことだ？お前らは何か知ってるか？」

ワザとらしく他の二人に聞くと、二人とも知らないと答える。

知っているだろうに白々しい…本当にム力つく奴らね。

「そんな事よりも、俺らと話してる余裕なんてあるのか？」

その言葉とほぼ同時に爆発音が聞こえ、さっきまで見ていた瓦礫の方を見ると、瓦礫を吹き飛ばし、埃まみれで軽い擦り傷が所々ある垣根帝督が瓦礫から出てきた。

「翼を二枚も吹き飛ばすなんてやっぱりなかなかのム力つきぶりだ。おかげで翼の再生に手間取っちまったじゃねえか。」

垣根帝督は背中の翼を羽ばたかせて空中に舞い上がり、六枚全ての羽を広げ、輝かせてさっき撃ってきた白球を大量に撃ち出してくる。さっきのあれをあんなに？冗談でしょう？

「黒子早く逃げるわよ。」

「わかりましたわ。お姉様捕まって下さい。」

私は黒子に掴まって安全な場所まで『空間移動』で逃げようとするけど、黒子の演算が終了する前に白球が近くに着弾し、『空間移動』できずに吹き飛ばされてしまう。

「イタタタ。黒子そっちは大丈夫？…黒子！」

黒子が飛ばされた方を見ると、吹き飛ばされたときに打ち所が悪かったみたいで気を失ってしまった。

黒子を守らないと…こうなったら撃ち落とす！！

私は黒子を守るように立ち、ポケットから一枚のコインゲームのコインを取り出し、上空でこっちを見下して白球を撃ち続けてくる第二位に狙いをつけた。

電流進む右手の親指でコインを撃ち出すと同時にローレンツ力で一気に加速させる。

手加減なしで撃ち出されたコインの速度は音速の3倍を軽く突破して、コインは空気摩擦で溶けて無くなってしまう。

だけど衝撃波は生きていて、射線上だけじゃなくその周囲の白球もかき消す。

そして砲弾と化した衝撃波は垣根帝督に直撃、翼をボロボロにして、その体を紙切れのように吹き飛ばした。

やったかと思っただけど、吹き飛ばされ地面に叩き付けられた垣根帝督はすぐに立ち上がり、また翼を広げてこっちに向かってくる。

「やってくれたなクソ女！いい加減くたばれコラ！！」

力を翼に籠めて、また衝撃波を放とうとしているから迎え撃つために、私もコインを取り出し『超電磁砲』をいつでも撃てるようにする。

そして翼が振るわれて衝撃波が放たれると同時に私も『超電磁砲』をさっき以上の威力で放つ。

放たれた衝撃波同士は空中で激突し、その衝撃で周りの廃ビルの壁に大きく亀裂が入る。

ただど次の瞬間私の放った『超電磁砲』の衝撃波はかき消され、翼から放たれた衝撃波が私を襲い、私も吹き飛ばされてコンクリートの壁に叩き付けられてしまう。

ごめん黒子…守りきれなかった。

私は意識が遠退く中、最後に見たものは止めをさそうと近づいてくる憎たらしい第二位の姿だった。

S i d e 撰津京輔

夜の八時

俺は今気を失っている御坂と風紀委員の女子を下部組織の連中に用意させた車で学舎の園の外にある常盤台の寮まで運んでいる。

その後、垣根さんが御坂たちを殺す前に上の連中から電話がかかっ

てきて、二人とも殺さずに寮まで送り届けると別の命令が来た。

レベル5と珍しい『空間移動』能力者だから助かったのか、それとも常盤台のお嬢様だから助かったのかわからないけど、二人とも命拾いしたな。

怪我とかは同じ女子のアリサがキャンピングカーに常備されている救急キットで治療して、一応身体的に問題は無かったらしい。

車を走らせ、常盤台の寮が近くなってきたところで

「うう、あれ？ここは？」

どうやら助手席に座らせていた御坂が目を覚ましたらしい。

頭とか痛がっていないから脳にも問題はないみたいだな。

「もうすぐお前らの寮ってところだな。」

そう答えてやると御坂は驚きた表情でこちらを向き、「摂津 あんたか。」と苦虫を噛み潰すような表情でボソツと呟く。

垣根さんに負けたことでも思い出してるのか？

「そつだ！黒子は？黒子は大丈夫なの？」

「耳障りだから大きな声を出すな。お前の後輩は後ろでまだ寝てるよ。」

まだ後ろで気絶している俺と追いかけてこしたクソツタレ風紀委員

の存在を教えてやる。

御坂は後ろを振り向き、後部座席で寝ている後輩の姿を確認するとホッとした表情を見せた。

「あんたが私たちを助けてくれたの？」

「いや、上の連中からの指示だ。」

俺じゃあキレてる垣根さんを止められる訳がない。

「そう。助けてくれたことには感謝してるけど、スキルアウトはどこへ連れて行っただの？あんたがこんな仕事してるのも上からの指示なの？上の連中って何者よ？」

目を覚ましたと思ったら答えられない質問ばかりしやがって…

「答えなさいよ！」

答えられる訳がないだろ！

「ほら着いたぜ。」

質問をスルーし車を運転していると常盤台の寮の前に到着し、その事を御坂に告げる。

「後ろで寝てる奴も連れて行けよ。」

「わかってるわよ」と呟くと助手席から降りて、後部座席のドアを開けて気絶してる後輩は背負うと、ドアを閉めて寮の扉に向かう。

「御坂!!」

「何よ?」

俺は帰ろうとする御坂を呼び止め忠告する。

「世の中知らない方がいい事だらけだ。事件にはあまり深入りしない方がいいぞ。」

「そう。今日のところはそういう事にしてこれ以上追及しないであげるわ。」

そう言うと寮の扉を開け中に消えていく。

特にお前の場合は知らない方が幸せになれることばかりだぞ。

第五話（後書き）

後書き

大変申し訳ございませんが、このSSでは『未元物質』の能力による攻撃を『未元物質』そのものと、『未元物質』によって歪められた物質・現象という説を採用させて頂いています。

後、勝手に御坂美琴の技を増やしてしまいました。

ファンの方本当に申し訳ございませんでした。

電子で荷電粒子砲はできないらしいですが、ここは軽くスルーしてください。

第六話

『連続女子誘拐事件』解決から数日が経った七月半ばの七月十五日。放課後、俺は教室で友達とこの後どこかに飯を食いに行こうと話している、友達の一人が正門の所に見えるうちの中学のものじゃない制服を見つけた。

「なあ。あの制服常盤台だろ？なんでうちの中学の正門なんかにいるんだ？」

「まさか待ち合わせか？恋人を待ってるのか！？」

いや…あいつが待ってるのは絶対恋人なんかじゃない。

むしろあの狩人が待っているのは獲物、つまりは俺だ。

「よし！それじゃあ待ち人を探そうぜ！」

「摂津。お前も手伝えよな。」

さつきから話しているこいつらは友達の伊勢いせ一輝かずきと志摩しま智哉ともや。

二人は『柵川中のトラブルバスターズ』と呼ばれていて、正義の味方の様にトラブルを解決している。

確かにトラブルも解決しているけど二人の存在自体がトラブルメーカーみたいなもので、トラブルに自分たちから首を突っ込み、解決

する度に新しいトラブルを作っている。

その悪名は学校中だけじゃなく、残念なことに第七学区の中学生の間でも有名になってしまった。

正義の味方をやりたいのなら風紀委員になればいいのに、本人達は退屈が嫌いで暇つぶしでやっているらしい。

つまりこいつらは暇つぶしに、困ってる常盤台の生徒が探している目当ての人を探そうってことだろう。

なんか厄介なことになりそうだな。

情報集めに行こうぜ的な流れになっている時。

「あれ美琴だよな？何してるんだろう？」

俺の友人にして、風紀委員にして、クラス委員長の河内茜が窓から話題の人物を見ながら独り言を呟いた。

なんで茜が御坂を知ってるんだよ！？

俺が驚いている中、情報を求めている伊勢と志摩がその独り言を逃す訳がなく

「委員長知り合いなのか？」

「一応友達だ。私が所属してる風紀委員177支部に彼女の後輩がいるからよく遊びに来るんだよ。」

御坂の後輩で風紀委員ってことはあのクソツタレテレポーターか！！
確かに俺の自由を賭けた必死の鬼ごっこをして、俺の取り調べをし
たあいつなら俺の通ってる学校を知っていてもおかしくないか。

「よし！じゃあ委員長はちよつと聞いてきてくれ。」

それくらいお安い御用だと茜は教室を出ていく。

ま、まあ…茜と友達なら茜に用事があるだけだ！…あるだけかもしれ
ねえ…あるといいなあ。

そう願っていたけど現実はまだ甘くない。

「京輔。御坂が呼んでるぞ。それにしても一体いつ知り合っただ
？」

さて…逃げるか。

俺は鞆を掴み靴に履き替え全力で裏門へ向かうが、

「摂津君どこへ行くのかな？」

「愛しの彼女が待つ正門はこっちじゃないよ？」

いつの間にか先回りしていた伊勢と志摩に両側から腕を掴まれ、正
門へと引きずられていく。

「待て！落ち着け！俺とあいつはそんな関係じゃねえんだよ。もつ
と殺伐とした関係だ！見つかったらマジでヤバいんだよ！」

「あゝはいはい。それじゃあ行きましょっね。」

ダメだこいつ等！完全に楽しんでやがる。

「常盤台の御嬢さん。お待たせしてすいませんね。後は若いお二人でこゆっくり。」

正門まで連れて行かれた俺は腕を組み仁王立ちしている御坂の前にそのまま放り出される。

「久しぶりね。あんたに聞きたいことがあるわ。」

その声には拒否を許さないような、絶対的な冷たさを含んでいるような気がした。

「で？美琴とはどういう関係なんだ？」

「摂津があゝの常盤台のお嬢様と密会する関係なんて超気になりますね。」

俺を売ったバカ二人が見守る中、近くのファミレスで御坂から『連続女子誘拐事件』について尋問を受ける。

「今日のところは」って言ってたけど、普通マジで追及しに来るか？

途中でトイレに行くと言ったけど、ファミレスから逃げたその翌日。

今度は別の女子二人から近くファミレスで尋問を受けている。

もちろんお題は御坂との関係と昨日の密会についてだ。

一人は茜。

もう一人は茜の昔からの親友？で、俺とは腐れ縁の絹旗最愛。

どうやら茜が昨日のことを絹旗に話したみたいで、それを聞いた絹旗が関係を聞き出そうと面白がって茜と一緒に俺を呼び出したみたいだ。

「期待に副えなくて悪いけど、ただのちょっとした知り合いだよ。」

「じゃあ、どうやって知り合ったんだ？」

言えない。

『連続女子誘拐事件』でスキルアウト達と銃撃戦をやった時に知り合ったなんて本当の事言えるわけがない。

「スキルアウト絡みで御坂が困ってるところに俺が居合わせたってところかな？」

嘘はついてねえ。ただ本当のこととも言ってねえだけだ。

「正義の味方気取りですか？摂津のくせに超生意気ですね。まあ、その御坂さんからしてみれば自分を助けに来た王子様に超見えたかもしれないですね。」

見られてるとしたら無免許でバイクや車に乗り、銃撃ちまくる悪党ってところだろうな。俺にもそのくらいの自覚はある。

俺がそんな事考えていると絹旗が茜の耳元で俺には聞こえないように何かを囁く。

すると茜は顔を真っ赤にして

「そ、そんなんじゃない！そんな事思っていないんだからな！！」

「隠そうと超必死ですね。でもバレバレですから無駄ですよ。」

女子二人でワイワイ騒いでいる。

一体絹旗は茜になんて囁いたんだ？ま、聞くだけ野暮つてもものだらうけど。

「そう言えばこの近くの公園に新しいクレープ屋が超オープンしたらしいですよ。ちょっと行ってみませんか？」

絹旗の奴俺への尋問も、茜イジリにも飽きたんだな。

まあ、これ以上詳しく聞かれないならそっちの方がマシか。

「俺は構わねえな。」

「私も構わない。」

「それじゃあ行きましょう。」と言いながら絹旗は俺に伝票を渡してくる。

いや、おかしくねえか？なんで普通に俺に渡してくるのさ？

「はあゝ。やっぱり摂津は超ダメですね。こういう場合は男が払うものでしょう。」

いやいや。相手が恋人なら俺だって払うさ！でもお前ら違うだろ。

ここは割り勘だと抗議しようとするけど

「……………」

茜が無言でプレッシャーを放ってきていた。

自分を可愛く見せて俺に奢らせるために上目使いでもしてるつもりなのかもしれねえけど、ぶっちゃけて言つと睨みつけてるようにしか見えねえぞ。

ううつ…チクシヨウ。

俺の財布から三人分のドリンク代750円が旅立っていった。

「で、これは何だ？」

今俺の手にはカエルのキャラクターのストラップがある。

公園に着いて、目的のクレープ屋でクレープを買うとサービスで『ゲコ太』とか言うカエルのグッズを貰ったわけなんだが、正直こんなものいらん。

ちなみに頼んだ三人分のクレープは全額また俺が払うハメになった。

クレープ屋から結構離れた所にある木陰のベンチに座ってそれぞれのクレープを食べていると

「奢ってくれたお礼に私のゲコ太を超プレゼントしてあげましょう。」

「

いや、お前はいらぬ物を俺に押し付けたいだけだろ。

「じゃあ私のも。」

じゃあってなんだよ！ていうか茜！お前もか！！

こうして俺は生活費と引き換えに三つの『ゲコ太』を手に入れたわけだが、そのおかげで財布の中身はかなり寂しくなってしまった。

そういうばこの公園の近くに銀行があつた気がする。

「ちよつと金下ろしてくる。」

そう言い残して俺は銀行に向かいながら、
 プレゼント
 園内で遊んでいたガキに処理する。 知らない『ゲコ太』を公

銀行にたどり着いたけど平日の昼なのに何故かシャッターが閉まっている。

何だ？臨時休業か？と思った瞬間、シャッターが爆発した。

「ハアア!？」

爆発の衝撃で俺は吹っ飛ばされてしまう。

一体何だ？敵の襲撃か？学園都市を邪魔に思う敵対組織のテロか？
某国のスパイが逃げられないと思って自爆でもしたのか？

「京輔大丈夫か？」

爆発音を聞きつけたのか風紀委員の腕章をした茜とオマケの絹旗がやってくる。

「一体何が起きた？敵襲か？」

クソッ……！仕事じゃないから銃は持ってないってのに！能力でな

んとかするしかねえってのか？

「摂津！とりあえず超落ち着いてください。」

「どうやら銀行強盗みたいだな。まあ、白井が対応してるから大丈夫だろ。それより痛むところは無いか？」

痛むところ特になかったから大丈夫だと告げ、茜が見ていた方向を見るとあのテレポーターが男を鉄矢で地面に縫い付けている。

だがそんな事よりもヤバいものが視界に入ってきた。

御坂美琴だ。

昨日俺は奴をダメして逃げている訳で、見つかりでもしたらヤバい。でも御坂は俺の存在にまだ気付いていないみたいで、何かを探している。

これは逃げるチャンスだろ。

すぐに行動に移そうとしてはれないようにゆっくりその場を離れようとするけど、

「どこに行こうとしてるんだ？その場に居合わせたんだから調書を取らせてもらうぞ。」

なんではれた！？

「逃げようなんて考えるなよ？もし逃げたらこの前みたいに説教を

するからな。」

この前、つまり六月下旬に風紀委員にお世話になった時に受けたお説教…あれは思い出したくないくらいに地獄だった。

「も、もちろん逃げるわけ無いじゃないですか。アハハハハ。」

これで逃げることもできなくなった。

さあ！どうする俺！？

とりあえず物陰に隠れてやり過ごそうとしていると、大気を切り裂くような轟音が響き、『超電磁砲』が発射される。

本当にム力つくほどの威力で、手加減しても向かってくる車を軽く吹っ飛ばしている威力を持つ。

羨ましい限りだ。

とりあえず事件が終わるのを見届けて、近くに止まっていたバスの陰に隠れて茜から呼ばれるのを待っている。

すると誰かが後ろから俺の肩を叩く。

俺と同じ立場で暇になってる絹旗か？それとも調書取るから俺を呼びに来た茜か？

そう思いながら振り返ると

「げえっ！！御坂！！」

鬼がそこにいた。

「昨日はよくも逃げてくれたわね。しかも自分の頼んだ物の代金も支払わずに！！」

「おおおお落ち着け御坂。は、話せばわかる。人間話し合えば分かり合えるはずだ。」

逃げれば茜にお説教、逃げなければ御坂に尋問、果たして俺は無事に明日を迎えられるんだろうか？

それは神のみぞ知る。

第七話

七月十八日

昼休み、昼食のために買っておいた新商品『真・焼きそばパン』を教室で食べていると突然携帯に電話がかかってくる。

携帯を開いて名前を見ると雲川さんからの電話だった。

こんな昼間から仕事なのか？

周りに友達とかいたから電話に出るのを諦めて、この時間人が少ない中庭に行ってベンチに座り、電話を掛けなおす。

「摂津です。さっきは電話に出れずすみませんでした。」

「それくらい別に構わないけど。それより一つ頼みごとがあるから。」

この前の仕事は人質救出だったけど、今回は何だ？また『外』で起きている『原石』に関する各国の情報収集か？

「貝積の孫を覚えているか？」

もちろんまだ覚えている。

貝積さんの孫はこの前の『連続女子誘拐事件』の時の被害者で、俺が助け出した女の子だ。

名前は確か播磨隼？だったはず。

「まさかまた誘拐されたんですか？」

「そうじゃない。その子がお前に用事があるらしいから。そういうわけで今日の三時半に第七学区の繁華街の広場で待ち合わせだから。」

まったくあのご老体は孫に甘すぎるんだけど、と雲川さんはイライラしながらばやく。

確かに貝積さんは統括理事会の中で基本的に甘い人だし、特にお孫さんには甘い。

お孫さんのために暗部を動かしたり、自分のブレインに直接面識のない俺への伝言頼んだりしている。

目に入れても痛くねえってか？やれやれ、いいお爺ちゃんだよ。

「やっぱり行かなきゃダメですか？」

俺は仕事だから助けたわけで、別に感謝してもらえるような事と思っ
つてねえ。

正直に言うただ行くのが面倒くせえ。

「ご老体を敵にする可能性もあるけど？」

「了解致しました！喜んで行かせていただきます。」

午後三時半過ぎ。

俺は学校帰りにそのまま向かい、第七学区の繁華街にある広場で播磨隼と待ち合わせる。

どうやらまだ来ていないらしく、姿が見えない。

しばらく待っていると

「お待たせしました。」

やや茶色の黒髪をポニーテイルにして、ワンピースを着た少女がやって来る。

半月ぶりくらいにその姿を見たけど元気そうでなによりだ。

七月の日差しの下で立ち話は暑くて死ねるから、近くの喫茶店に誘う。

窓際の席に座り俺も彼女もミルクティーを注文する。

「この前は助けていただいてありがとうございます。」

「そういう依頼だったから気にしないでいいよ。君のお祖父さんにはいつもお世話になってるから頼みも断れないよ。」

感謝されるのに慣れていないせいか、こういう対応になってしまう。

「それでも助けてくれたのは摂津さん達です。」

ヤバいな、なんかこれマジではずかしくなってきた。

「それよりもう一人で出歩いて大丈夫なの？」

とりあえず無理やり話を逸らす。

「まだちょっと男の人が怖いですけど、できるだけ友達と一緒にいますから。」

確かに集団で行動していればその手のバカは犯行に移しづらいだろう。

それに貝積さんの事だから本人にはばれないように護衛を付けている可能性が高い。

頼んでいたミルクティーがテーブルに来たところで予想外の事態が起きる。

突然外から爆発音が聞こえてきた。

それにしてもここ最近よく爆発音を耳にするな。

「な、何が起きたんですか？」

とりあえず荷物を置いたまま二人で店の外に行き、爆発音がした方向を見ると、同じ通りにある洋服店『セブンスミスト』から煙が上がっていた。

また強盗か、と思ったけど茜が最近『グラビトン虚空爆破事件』の捜査で大変と言ってたのを思い出す。

『虚空爆破事件』なのかもしれない。

外で煙を眺めていてもどうしようもないから、とりあえず店内に戻ると

「行かなくてよかったんですか？」

「ああいうのは風紀委員の仕事だよ。彼らに任せておけば大丈夫だろう。」

俺はごみ処理係兼便利屋で、せいぎのみかた風紀委員なんかじゃない。

そうなんですか、と言った後で播磨ちゃんは顔を赤らめ、モジモジしながら俺に話しかけてくる。

「あ、あの！実はお願いがあるんですけど、聞いていただけますか？」

何だ？まさか愛の告白！？

いやいやいや！そういうのはマジで困るぞ！！

「お、俺にできることならな。」

えっと、その、となかなか言い出せないでいたが、覚悟を決めたみたいで

「それでは私を助けに来た時に一緒にいらっしやった常盤台の女子の方を紹介していただけませんか？」

予想の斜め上をマッハでぶっ飛んでいくお願いがやって来た。

まさか百合ですか？これが噂に聞く百合なんですね！？

いや、これはお礼を言いたただけだ！きつとお礼を言いたただけに違いねえ。

そうだといいなあ。

そうでない俺は御坂と雲川さんに何て言えばいいか…

俺が何も言えずに固まっていると、

「か、勘違いしないで下さいよ！べ、別に好きになっちゃったとかじゃないんですよ？ただお礼を言いたただけなんです。確かに憧れてしまうほど素敵でしたけど…」

最初は慌てて誤魔化しているみたいだったけど、最後は本音ダダ漏れだぞ！おい！

「何も誤魔化してなんかいませんからね！」

「ウンワカッテルヨ。理解ハ幸セ。」

顔を真っ赤にしながら否定されてもな

「…なんか棒読みな気がするんですけど。日本語も変ですし。」

気のせいだよ、と言って俺はどうするか考える。

さっさと御坂の事教えてしまいたいけど、よくよく考えると俺はあいつの連絡先とか知らない。

御坂とは友達だと言っていた茜ならば連絡先くらい知っているかもしれないねえな。

でも『^{グラビトン}虚空爆破事件』で忙しいかもな。

そう思いながらさっき爆発事件が起きたセブンスミストの方向を見ると、二人の女子中学生がこっちに歩いてきてるのが見える。

顔は遠くてよくわからないけど、片方はうちの中学の制服、もう片方は常盤台の制服だ。

なんとなく嫌な予感がしながらも、なんとなくその二人組を眺めていると、顔が確認できたときには残念ながら見覚えのある常盤台の奴とバッチリ目が合ってしまった。

S i d e 御坂美琴

私と初春さんと佐天さんは放課後に洋服店『セブンスミスト』で買い物をしていると、初春さんをターゲットにした『虚空爆破事件』に巻き込まれた。

初春さんと女の子を襲おうとした爆風は居合わせた上条^{あいづ}当麻が未だにどつという原理かわからないけど右手だけで防いでくれる。

その後私が犯人を捕まえて無事に事件は解決されたわけだけど、あいつが初春さん達を助けたのにそれが私の手柄になっていることに納得できない。

しかも「誰が助けたかなんてどうでもいい事だろ」なんてかつこつけやがつて！ム力つく！

まあ、初春さん達を守ってくれたことには感謝してるけど。

みんなで帰ろうと思ってその後しばらく待ってたけど、黒子が言うには事件の後処理とか書類作成とか忙しくなるみたいで佐天さんと話し合って先に帰ることにした。

「じゃあ私たちは先に帰ってるわね。」

黒子と初春さんにそう告げて佐天さんと一緒に帰る。

また今度一緒に買い物に行く事などを話しながら『セブンスミスト』がある通りを歩いていると、なんだか視線を感じる。

ふと通り沿いの喫茶店に目を向けると見慣れた人物と目が合う。

摂津京輔。

つい最近知り合った人間性に問題のある男だ。

聞きたいことがあったからよく尋問もとい質問をしていたけど、まったく口を割らないからもう諦めかけている。

その摂津が女の子と一緒に油茶していたから今回は見逃そうと思っていたけど、摂津の方から手招きしてくる。

「ごめん佐天さん。ちょっと呼ばれちゃったから先に帰ってて。」

「わかりました。でもその代り話聞かせてくださいね。」

チラリと喫茶店の中にいる摂津を見た後、私を見てニヤリと笑い佐天さんはこの場を去っていく。

確実に摂津のせいで佐天さんに誤解された可能性があるわね。

店内に入り、摂津達がいる席の近くまで行くと

「君を助けた常盤台の人、御坂美琴が来てくれたぞ。」

と言う摂津の声が聞こえ、一緒に座っていた女の子がこっちを振り向く。

どこかで見たことがあるわね…ああ！『連続女子誘拐事件』のときの女の子！

とりあえず座れと摂津に言われ、私が席に着くと

「彼女がお礼を言いたいそうだ。それじゃあ御坂！彼女を頼んだぞ。さて邪魔者は消えますか。」

がんばれよ、と女の子に言い残し摂津は店を出ていき、私と女の子だけがテーブルに残された。

あれ？これはどういう事なのよ？

摂津の奴、今度会ったら覚えてなさいよ！

とりあえずお互い自己紹介をしていると店員がケーキと紅茶を持ってきてくれる。

頼んでないです、と言うと「先ほどのお客様からです。お代も頂いておりますので」と言われる。

摂津もなかなかいい事するじゃない。

まあ、今回は許してあげるか。

別にケーキに釣られた訳じゃないんだから。

紅茶を飲み一息ついたところで

「この前は助けただきありがとうございます。」

「いやいや！全然気にしないでいいのよ。私なんて特に何もしてないんだから。」

頑張っていたのは摂津で、私は助け出した二人と一緒にいてあげただけだ。

「いえ、あの時はやさしくしていただいて本当に安心できました！」

それはよかったけど、声が少し大きくなっている気がする。

「男たちの攻撃を防いでいた御坂さんもかつこよかったです。とても素敵でした！！」

ちょー！声が大きいわよ。

ああ…なんか周りの他のお客さんを感じる。

「播磨さん少し落ち着い「御坂さん！お姉様と呼ばせてもらってもよろしいですか！？」…はい？」

百合だ、と周りのお客さんの話声が聞こえる。

呼ばないで、と言って百合じゃないことをアピールしたいけど、播磨さんは期待した目で私を見つめてくる。

うう、目をそんなにキラキラさせないでよ。

「ダメですか？」

「…好きに呼んでいいわよ。」

断つたらなんかこつちが申し訳なくなる。

「私来年がんばって常盤台に行きますね。その時はよろしくお願いしますね、お姉様。」

後輩が増えるのは嬉しいけど、これ以上黒子みたいな変態が増えてもらったら困るわね。

これ以上この話題で話すと、周りからますます変な目で見られそうね。

よし！話題を変えるか。

「そう言えば摂津とはどういう関係なの？」

普通に考えるとこんなお嬢様みたいな女の子が、あんな人間性に問題のある男と知り合いとは思えない。

「私とは面識が無いのですが、お祖父様のお知り合いの方らしいです。」

摂津みたいな奴を使えるってお祖父さんは一体何者よ？

「播磨さんのお祖父さんって？」

他に人がいるところでは話にくいのか私の耳元で囁く。

「お祖父様からはあまり他の人には話すなと言われていますが、お祖父様は一応この学園都市の理事をしています。」

お姉様だから話したのですからね。他の人には内緒にしてくださいね、と釘を刺される。

統括理事会の理事か、かなりの大物ね。

それじゃあ摂津達は播磨さんのお祖父さんの部下なの？

いや、待てよ…以前摂津は上の連中って言っていたわね、ということとは統括理事会が摂津達のボスなの？

統括理事会が関わっているのなら、摂津の言うとおりあまり深入りしない方がよさそうね。

「さてと、そろそろ帰りましょうか。心配だし寮まで送ってあげるわ。」

ありがとうございますと言いながら店を出たところで播磨さんは私と腕を組んでくる。

まあ、これくらいならいいか。

徒歩だと播磨さんの寮まで遠いから、タクシーを利用しようと思って大通りを歩いていると

「おおおおお姉様！そ、その小娘は誰ですの？」

振り向くとそこには愕然とした表情の黒子と苦笑いする初春さんがいた。

「お知り合いですかお姉様？」

播磨さんが訪ねてきたから答えようとするけど、それより早く

「んなつ！？お姉様をお姉様と呼んでいいのはこのわたくしだけですのよ！この泥棒猫が！！」

はあ、面倒なことになってきたわね。

不幸だわ。

第八話

『レベルアップ
幻想御手』

使うと能力の強さを簡単に上げてくれる道具と最近ネット上で有名な都市伝説。

都市伝説だから信じていなかったけど、最近登録されている能力の強さ以上の能力を発揮した奴が事件を起こしているらしいから本当にあるのかもしれない。

実際にスキルアウトがレベル2程度の能力を使って能力者狩りをしている、茜が忙しいとよく愚痴っている。

能力者狩りをする程度なら俺らも忙しくないんだけど、厄介なスキルアウトは統括理事会への反逆や大規模な破壊活動を実行しようとしているから、そいつらへの対応で暗部も大忙しだ。

「で、今ので終わり？」

「そうみたいね。とりあえず、今のところは追加の仕事はないわ。」

今俺はアリサと二人で第十学区の通称『ストレンジ』と呼ばれる地域に来ている。

この仕事は本日三つ目の仕事で、今回も反乱を企むスキルアウトの鎮圧だ。

いい加減今日は疲れた。

学校帰りにスキルアウト3つ潰して帰る中学生なんてなかなかないだろう。

「最近の仕事これで何件目だっけ？」

「確かこれで12件目ね。おかげでしばらくはバイトしなくても生活できるわ。」

確かに報酬は結構手に入ったけどさすがにハードすぎる。

最近は結構夜遅くまで仕事しているせいでかなり眠い。

ちなみに今日も仕事を終わった時には九時を過ぎていて、今から帰って夕飯を作るのはめんどくさい。

「なあアリサ。飯食いに行かないか？」

「いいわよ。今から帰っても寮の食堂は閉まってるだろうし。」

とりあえずここまで乗ってきたバイクで第七学区まで戻って、アリサが早く帰れるように学舎の園近くのファミレスに入る。

お互いが頼んだ物が揃って飯を食べながら、最近の仕事について愚痴を言い合った。

「どうして『幻想御手』を作った科学者、木山って言ったかしら？七千人近くを昏睡状態にしてるのに、どうして私たちに暗殺や捕獲の仕事が来ないのかしら？」

「上の連中に何か考えがあるんだろうさ。『幻想御手』には脳波のネットワークを作る効果があったよな？ 奴の狙いは何なんだ？」

「それこそわかるわけ無いじゃない。」

そうだよな。

上の連中が木山を泳がせている以上、奴の狙いはわからないままだ。

まあ、気になるけど俺達が動かなくていいって事は風紀委員や警備員ががんばって解決してくれるだろう。

「木山の目的なんかどうでもいいけど、早く事件が解決して欲しいわね。でないとゆっくり休むこともできないわ。」

その後も飯を食いながら仕事に関して愚痴りあっていたけど、いつの間にか俺がアリサの愚痴を聞かされていた。

仕事の愚痴に始まり、バイトの時の愚痴、お嬢様学校での生活に対する愚痴など、俺も頑張って聞いたと思う。

「ああ！ 喉が渴いた。ちょっと飲み物取って来るわね。」

一時間くらい喋れば喉も渴くだろうよ。

まあ、それでもここ数日では一番平和な時間だったな。

だが俺はこの後ここ最近で一番の窮地に立たされることになる。

もうすぐ十一時、特待生で門限とか無いアリサだけど流石にそろそろ帰らないとまずいだろう。

飲み物を取ってきたら帰ることを提案しようと思いつつ、ふと出入り口の方を見ると風紀委員の腕章を付けた学生が入ってきた。

こんな時間にファミレスにいるところなんて見つかったらいろいろ厄介な事態になることは分かりきっているから、なるべく顔を見られないようにしていたけど

「京輔。今何時だと思ってる？」

大魔王^{あかね}からは逃げられない運命みたいだ。

「ききき奇遇だな。帰りが遅くなったから飯食って帰ろうと思ってな。食ったらすぐに帰るよ。」

なんとかしてお説教から逃れたい。

「ふうん、まあいい。早く帰」「ごめん京輔、待たせて悪かつ……」

タイミングの悪い事に飲み物を取りに行っていたアリサが戻ってきて、その場にいた茜と何故か睨み合う形になってしまった。

しばらく沈黙が続き、あまりの空気の重さに俺の胃がギリギリしてきた所で

「「京輔…こいつ誰？」」

何故か二人同時に聞かれる。そして睨まれる。

「と、とりあえず二人とも落ち着こう。」

緊急事態発生！緊急事態発生！悪魔と魔王が遭遇した。我救出を求む。

悪夢のような深夜の遭遇から数日経った七月二十四日。

最近仕事ばかりだったせいか学校が終わったらずに『スクールのアジトに行く事が習慣になっていた。

毎日あったスキルアウト鎮圧任務が今日はまったく入らず、暇を持て余している。

昏睡状態になった犠牲者が一万くらい出ているらしいから、反乱を企んでいたスキルアウトが全員昏睡状態になっているのかもしれない。

全員暇みたいで垣根さんは誰かとメールしているし、アリサは携帯音楽プレーヤーで音楽を聴いているし、丹波はマンガを読んでいる。

ちなみに俺は携帯端末で学園都市が開発した新しい武器のカタログを見ていた。

暇なときはたまにこうして武器のカタログを見て、使えそうな武器を取り寄せてもらったりしている。

今回の新作に当たりはないな。

特にこの『軽機関散弾銃』セミオートショットガンみたいな物か？威力は高いかもしれないけど、射程短すぎるだろ！

射程外から撃たれたら一発でアウトじゃねえか。

こんな際物誰か使う奴いるのか？

そもそも開発した技術者アホだろ。

そんな時に俺の携帯が鳴る。

画面に表示された名前は伊勢一輝。

「もしもし、なんか『幻想御手』について情報持ってない？」

あいつらはまた厄介ごとに首を突っ込んでるのか。

はあーやれやれ。

「あるけど、どうした？」

「実は友達が『幻想御手』を使って昏睡状態なんだ。それで犯人を

探してるんだよ。」

普通の中学生に見つけられるなら風紀委員や警備員は苦勞しないだろう。

でも俺は犯人を知っている。

科学者 木山春生

教えてやりたいが、俺も表向きは一応普通の中学生だから知っているのはおかしい、だから怪しまれないために教えるわけにはいい。

「『幻想御手』は脳波に影響を与えているものだ。だから犯人は脳に関わった研究をしているか、A I M 拡散力場に関する研究をしている科学者の可能性が高いと思うぞ。」

まあ、これくらいのヒントなら許されるだろう。

「サンキュー！流石は俺達のブレインだ。助かったぜ！」

「ちょっと待て！俺がいつお前らの「摂津！仕事だ。」スマン用事が入ったからまたな。」

いつの間にかあいつらの頭脳にされていたから否定したかったけど垣根さんから呼ばれて呼ばれた方を見ると仕事へ向かう準備をしていた。

「またスキルアウトの鎮圧ですか？」

ウンザリしつつも尋ねてみると

「それどころじゃねえみてえだ。緊急の仕事が入ってな、原子力実験炉の防衛だ。」

原子力実験炉の防衛なんてなかなか大変そうなお仕事じゃないか。

「何が起きたんですか？」

「『幻想御手』の原作者の木山春生がとんでもねえ化け物を生み出したらしくてな。そいつが原子力実験炉の近くに出てきたから万が一の事を考えて俺達に仕事が出来たんだよ。」

昔の怪獣映画かよ！？

「さっさと準備して行くぞ。」

現場の原子力実験炉に到着してみると化け物がこっちに向かって来ていた。

だがそれ以上に驚いたことは先に誰かが戦っていたことだ。

その戦場から感じる圧倒的電圧と磁力。

これほどの能力を使えるのは学園都市が広いと言っても一人しかない。

最強の電撃使い 御坂美琴

「あれはこの前のクソ女じゃねえか！？まあ、奴が倒してくれるなら俺達の仕事が減って楽になるな。」

確かに御坂があのかけ物を倒してくれば、俺達はほとんど何もせずに仕事終了になる。

頑張れ御坂！陰ながら応援しているぞ。

そんな応援が効いたのか御坂がお得意の超電磁砲を放って、化け物の核を撃ちぬいて倒してしまう。

たった一人であんな化け物を倒してしまうなんて流石はレベル5。

おかげで実験炉に当たりそうな流れ弾を迎撃する程度で仕事を終わることができた。

犯人である木山春生も警備員に拘束されたから俺達も帰ろうとしたけど、丹波が木山春生を見たまま動こうとしない。

「木山春生がどうかしたのか？もしかして知り合いか？」

「俺は木山先生の生徒だったことがあるんですよ。」

適当なこと言ったのにまさか当たってるなんて…

「俺が置き去り（チャイルドエラー）ってことは昔話したと思うんですけど、小児用能力教材開発所付属小学部って所にいたんですよ。その時の先生が木山先生だったんです。途中で俺は別の研究所に移されましたからそれ以来会ってなかったですね。」

丹波の奴、結構重たい経験をしてきているんだな。

「そうか…今度面会に行くといいさ。」

そうします、と丹波は呟いてようやくその場を離れ、俺達は帰路に着いた。

こうして『幻想御手』事件は終わりを告げ、俺らもしばらくはゆっくりできるだろう。

第九話

夏休みのとある日、科学が発達しているここ学園都市でも一步部屋の外に出ると30度を軽く超え、外出する気はまったく起きなかった。

暇つぶしに寮の自分の部屋で映画を見ていたら、携帯にメールが来る。

「花火大会に行かない？」

アリサからのメールだった。

そう言えば今夜花火大会があるんだっとな。

暇だし夜ならそこまで暑くないだろうから行ってもいいかな。

花火大会なんて久しぶりだ、と思いながら俺はアリサに行くとメールを返信した。

今はまだ昼過ぎだし、どのみち夕方までは暇だし映画の続きでも見るか

その後時間が経って集合時間の六時。

待ち合わせの場所で待っていると、青色の生地に花が刺繍された浴衣を着たアリサがやって来た。

普段わりと派手な服を好んで着ていて、夜の仕事の時なんかバイト帰りなのかドレス姿でアジトに来たりする。

そんなアリサが大人しめの服装をしていた。

「どう似合ってる？」

「ああ、そういう服装もいいと思うぞ。」

この格好は正直にそう思える。

「ふふつ、ありがとう。それじゃあ行きましよう。」

そう言いながら左手を差し出している。

「ねえ。手が空いてるんだけど？」

「繫げと？俺に手を繫げと言いたいのか？そんな恥ずかしい真似をしろと言うのですかアリサさん？」

「はあ、しょうがねえな。今日だけだからな。」

俺も甘いな。

そう思いながら俺はアリサと手繫いで花火の会場に歩いて向かった。

「本日はエスコートさせていただきますよ、お嬢様。」

「あらそう？それじゃあよろしく頼むわね。」

花火大会会場。

そこには金魚すくいやたこ焼き、射的など様々な夜店が川沿いの道に立ち並んでいて見るからに楽しめそうだ。

この花火大会は夏祭りのようなものだから、こんな屋台とかも醍醐味の一つだと俺は思う。

こういう花火や屋台とかテンションが上がらないはずがない。

「あのたこ焼きとかかなり美味そうじゃない？」

ああ、あの匂い！たまらねえな！

「ねえ見て！あっちのお好み焼きも美味しそうよ。」

確かにあのお好み焼きもなかなかいい感じだな。腹も減ってるし、両方買って食べようかな。

俺は両方の屋台に行き、たこ焼き一つとお好み焼きを二つ買ってアリサがいる所まで戻り、お好み焼きを渡す。

「ほら奢りだ。食いたかったんだろ？」

「えっ！？いいの？あ、ありがとう。」

『幻想御手』の時の稼ぎのおかげでこれくらいの出費じゃ俺の懐は痛くもないのさ。

見た感じや匂いとかもよかったけど、祭りの雰囲気もあつてか味もかなりおいしかった。

食べ終わり、まだ花火の打ち上げが始まる時間になっていなかったから俺はアリサに連れられて屋台を巡ることになった。

途中で御坂や俺を捕まえた風紀委員、うちの学校のお花で有名な風紀委員達を見かけた気がする、御坂とは遭遇しないことを祈ろう。

「京輔、あれ取つてよ。」

アリサが指さした方向を見ると射的屋の景品のぬいぐるみが見える。

「自分で取れよな。」

「私より京輔の方が上手じゃない。」

確かに『スクール』の中だと俺が銃器の扱いは一番上手いけどさ。

「まったく、しょうがねえな。」

俺はアリサが欲しがっているぬいぐるみに狙いをつけ弾を発射する。

放たれた弾丸はぬいぐるみに見事に命中して景品を落とし、それをアリサに渡す。

「あ、ありがとう大切にするわ」

その後金魚すくいでも勝負したり、一緒にりんご飴を食べたりして花火が始まるまで過ごしていると、ついに花火が始まる。

買ったかき氷を食べながら花火を見る。

「た〜まや〜。」

ドンツというお腹に響く音と共に色とりどり、様々な形の花火が打ち上げられて目を楽しませてくれる。

そんな光景を見て俺は思わず叫んでしまった。

最先端の科学のおかげで快適な生活を日頃送らせてもらっているけど、たまには昔からある花火とかを楽しむのもいいものだと思う。

「ホント綺麗よね。」

二人で花火を見ている姿は付き合っているように見えるかもしれない。

それくらい今、この瞬間は穏やかな時間が流れていた。

だけどこの穏やかな時間も終わりを告げる。

「ん？あれ摂津じゃねえ？」

「確かに摂津だな。あの野郎女子と一緒にいるぞ！」

二人組の男が俺達のいる方に近づいて来ていて、俺の名前も聞こえたからよく見てみると伊勢と志摩だった。

はあ…面倒くさい奴らに見つかったな。

「アリサ！逃げるぞ！」

とりあえず俺はアリサの手を引いて厄介なバカコンビから逃げ出す。

「えっ？ちよつと！？」

手を繋いだまま走って人混みに紛れ込んであまり人がいないところまで逃げて、あの二人をようやく撒くことに成功する。

ずっと走りっぱなしだったから息を整えてからアリサに謝って、突然走り始めた理由を話した。

「突然走りだして本当に悪い。実はあの二人友達でさ、あのままだと確実に面倒なことになっていただろうからさ。」

「面倒なことって言うてもちよつとでしょ？それくらいだったら別に構わないのに。」

こっちは困るんだよ。

あいつらの事だからデジカメで写真を撮って、その写真を拡大コピー

ーしてから学校中に貼るくらいやるだろうからな。

「お嬢様学校に通うお前は知らないかもしれないけど、あの二人が『柵川のトラブルバスターズ』なんだぞ。」

第七学区の中学生の間では有名な名前を出してみる。

でも『学舎の園』の中は別世界だからな。

「ああ…さっきの二人があのか（・・・）『トラブルバスターズ』なのね。」

学校に乗り込んできた他の中学の不良達を振り返りにした話とか『学舎の園』の中でも聞いたことあるわ、と話を続ける。

伊勢、志摩、お前ら『学舎の園』でも有名になってしまっているぞ。

マジで少しは自重しろ。

逃げているうちに人気の無い所まで来てしまっていたから、屋台が立ち並ぶ人気の多い方に戻ろうとしたところで異変が起きる。

ん？なんか地面が少し揺れてる気が…

次の瞬間俺達を襲ったのはかなり激しい地震だった。

「きゃあ！」

突然の地震にアリサはよろめいて俺の方に倒れ掛かってきて、俺も一旦はアリサを受け止めたけど、地震のせいでバランスを崩してし

まう。

俺はアリサに押し倒される形で倒れてしまい、何か唇に柔らかい感触がした。

S i d e アリサ

夜の八時過ぎ。

私は寮に帰って、浴衣のまましばらくの間ボーっとしていた。

花火を最後まで見たけど、地震の後はほとんど会話をしなかった。

あれは事故！そう、事故だってわかっているけど

私 京輔とキスしちゃったんだ…

私の初めてだったから最初訳がわからなかったけど、キスだとわかった瞬間には何故か嬉しさがこみ上げていた。

絶対あの時顔が真っ赤だったと思う。

やっぱり私は京輔の事が好き。

あまり素直な性格じゃないし、少し冷たいところもあったりするけれど、知り合いにはなんだかんだ言っていていつも優しい。

仕事の時だって何度かピンチに助けに来てくれたことがある。

知り合って一年と少ししか経ってないけど、そんな京輔を私はいつの間にか好きになっていた。

見た目は普通より少しだけいい程度だし、性格もあまりいい方じゃないから京輔に恋人ができる可能性は低いはず。

そう思って安心していたけど

河内 茜。

この前の夜にファミレスで出会った京輔と親しい感じの風紀委員。

私の勘だけどあの女も京輔の事が好き。

まさか敵が出てくるなんて…絶対に負けられない！

そう思っただけ今日の花火大会に京輔を誘ってみたけど、途中までは成功だったかな？

あとはあの事故で京輔が私の事を少しでも女として意識してくれるといいんだけどな。

怖くて使ったことがなかったけど、別れるときに京輔に対して『心理定規』を意識し始めて初めて使ってみた。

心の距離を観測してみた結果、京輔の中で私との距離はかなり近かったから嬉しかったけど、あの女も同じくらいの距離だった事がなんか悔しい。

でもそれ以上に気になったことがある。

それは私とあの女より心の近い女がいた事だ。

大和彩乃^{やまと あやの}って一体誰なの？

第十話

八月十四日。

季節は真夏。

外の気温は35 を超え、日の光は一切の容赦もなく照り付け、アスファルトの道路からは陽炎も見える。

俺こと撰津京輔は今現在エアコンをガンガン効かせた涼しい自分の部屋で、何度も読んだマンガをまた読み返している。

つまり暇だ。

夏休みの宿題をやればいいのかもしれないけど、生憎やる気は夏休みの初日から一切ない。

誰か誘って遊びに行こうと思って連絡を入れたけど、茜は明日からある風紀委員の夏季公募の準備で忙しいらしい。

アリスを誘おうかとも考えたけど、この前の花火大会のときの事故があるから誘いづらい。

他の友達はお盆だから許可を貰って実家に帰っていたり、彼女とデート中だったり、暑いから外に出たくない奴もいたりして結局誰も捕まらなかった。

しょうがない、あいつらでも誘うか。

あいつらとはもちろんバカコンビの伊勢と志摩だったりする。

電話でもかけて誘おうとしたところで先に携帯に連絡が入った。

おっ！誰からの誘いだ？

ちよつと楽しみにしながら携帯を開いてみる。

着信 雲川芹亜

仕事か。

いや待て、遊びに行こうとお誘いの可能性も…絶対無いな。

軽く憂鬱な気分にながら電話に出ると

「またお前に仕事を頼みたいんだけど。」

ま、普通に考えてそうだろうな。

「お前は『絶対能力進化（レベル6シフト）』を知っているか？」

『絶対能力進化』って言ったら『妹達』を二万人ブチ殺して一方通行^{アクセラレ}をレベル6に上げましようって計画だったはず。

「それを妨害してもらうから。」

「いいんですか？あれって統括理事会が絡んでいませんでしたっけ？」

流石に統括理事会を敵にするような仕事はしたくないし、やったら確実に他の暗部の連中に消されるだろうな。

「問題ないけど。詳しく説明するから、これから話すことは他に漏らすなよ。」

雲川さんの話によると統括理事会も一枚岩ではないらしい。

理事会メンバーの半数を占め、自分たちの利益のためなら手段は選ばない過激派。

親船最中を筆頭とした学生のために何かしようと頑張っている穏健派。

そしてどちらでもない中立派。

ちなみに貝積さんは中立派らしい。

つい数日前テレステイナーとか言う奴がレベル6を生み出すための実験で色々と学園都市に被害を出したらしく、これがこの前の『乱ボル』
タイガイスト 雑解放』事件の真相。

この『絶対能力進化』の実験は人気無い所とは言え街中で行われたりするから、情報の隠ぺいや他の学生の安全、学園都市への被害の事を考えて穏健派は早く止めさせたいらしい。

だけど計画の関連研究所などから賄賂を貰っているのか過激派の連中が計画の続行を支持している。

理事長は何か裏が有りそうで、どちらかと言うと早く『絶対能力進化』を止めさせたいらしいけど、自分からは止めさせようはしない
で傍観している。

そこで雲川さんの提案で貝積さんは穏健派に恩を売っておくために
『絶対能力進化』を潰す方針にした。

それで俺に仕事が来たわけか。

妨害によって計画がうまく進行せず、自分たちに入る利益が少なくなれば計画に賛成している理事達も計画の中止に意見を変える可能性もある。

意見を変えない理事達でも利益が無くなってきていけば、交渉で意見を変える可能性も期待できるって考えなのか。

まあ、実際に賛成している理事達との交渉とかは雲川さんと貝積さんの手腕に期待するでしょう。

「今回の仕事は理事会の半数を敵に回すことになるからできる限りこっちもサポートはするけど、いざとなったら切り捨てるから。」

やれやれ、かなり厄介な仕事になりそうだな。

さてと、まずは情報収集からだ。

八月十五日の深夜

『絶対能力進化』についての情報収集もだいたい終わり、今日の作業はこれくらいにして寝ようとしていたところに雲川さんから連絡が入る。

「御坂美琴が『絶対能力進化』の計画を知ったから。」

せっかく忠告までしておいてやったのに……まったく溜息が出る。

「おそらく御坂美琴はこの後計画を潰そうとするだろうから、お前は御坂に協力しろ。」

「もしかしてこうなる事を予想して御坂の知り合いの俺にこの仕事を頼んできたんですか？」

そうだとしたら知り合いを利用して計画を妨害しろって事だからなかなか酷い話だ。

「それもあるけど、単純に私が使える戦力でお前が一番優秀だからだけ。」

ちゃんと評価されてるのはありがたいけど、それもあるんだ……

「それに御坂美琴を隠れ蓑にしていた方がこちらの存在も隠せる訳

「ただ。」

確かに御坂には悪いけどその方が俺の身も安全だな。

それじゃあ俺が集めた情報をあいつに渡して、二・三日様子を見るか。

「わかりました。それじゃあ俺は御坂を利用して動く方針で行きます。」

まずは御坂を探すか。

S i d e 御坂美琴

八月十六日

知りたくはなかったけど知ってしまった。

『絶対能力進化』

私のクローンを使って一方通行のレベルを上げる計画。

計画を知った翌朝に通りのベンチで、長点上機学園の生徒で計画の元関係者の布束砥信ぬのたはしのぶにまた出会った。

彼女といろいろ話をして、彼女の意見も聞いたけどやっぱり私の意見は変わらない。

「私は…クローンを人間としてなんて見れないし、殺される事を受け入れている連中を助けようなんて思えない。でも、人のDNAマツプをくだらない実験に使うヤツらを見過ごす気もないわ。」

絶対に計画をぶち壊してやるわ。

「私が撒いた種だもの。自分の手で片をつけるわ。」

これは私が背負うべきもののよ。他に人に迷惑はかけられない。

「素直じゃないわね。計画の関連施設は二十を超えるわよ。一人でやるつもり？」

例え二十だろうが三十だろうが私はやらなくちゃいけないのよ。

「私を誰だと思ってるの？」

「お前か？お前はただの大馬鹿野郎だな。人のありがたい忠告を無視しやがって。」

突然聞き覚えのある声が話に割り込んでくる。

摂津京輔

私と同じ電撃使いで、たぶん学園都市の裏側をよく知ってる人間だ。

「なんの用よ？計画を知った私を殺しにでも来たの？」

「俺が正面から戦ってお前を殺せるかよ。殺す気ならさっさと狙撃でもして殺してるよ。」

じゃあ一体何の用なのよ？

「自分の手で片をつけるんだろ？そんな御坂に心優しい知り合いからのささやかなプレゼントだ。」

そう言いながら小型メモリーチップを私に投げってくる。

とりあえずキャッチしてそのメモリーチップを私の携帯端末に入れて、ファイルを開いてみると『絶対能力進化』に関する詳細な資料だった。

「あんた何が目的よ？」

摂津が親切心でこんな事をする訳がない、つまり何か絶対に裏があるはず。

「なに、別に知り合いが困っているみたいだから手伝ってやろうと思っただけだ。」

絶対に嘘ね。

だいたい私がこの計画を知ったのは昨日の夜で、こんな情報をすぐ

に集められる訳がない。

でもこいつの事だから真実は言わないだろう。

まあいいわ…今は摂津の思惑に乗ってやるわ。

「それにしてもアンタこの計画の事知っていたのね。」

「この計画は結構有名だったからな。だからお前たちを寮の前まで送って行った時に「世の中知らない方がいい事だらけだ。事件にはあまり深入りしない方がいいぞ。」ってお前のために忠告してやっただろ。」

そう言えばあの事件のときにこいつらは『妹達』って単語を出していたからその時には既に知っていたのね。

それにあの時の忠告はこの計画の物だったのね…確かに知らない方がいい事だったかもしれないわね。

でも今は知ってしまった。

そして計画をぶち壊すと私は決めた。

だから私は止まる訳にはいかないのよ。

「お前は一人でやるつもりみたいだけどさ。正直いくらお前でも一人じゃ厳しいと思うぞ。手伝ってやるんだから俺や、誰か知らないけどそっちの女の人とか頼れよな。」

摂津はそう提案してくるけど、その提案には乗れない。

「さつきも言っただけど、自分の手で片をつけたいのよ。」

「そうか。それならこっちも勝手にやらせてもらう。」

そうね。私もそうさせてもらうわ、とギョロ目の布束さんも続く。

「勝手にしなさいよ。」

勝手にするのなら私はこの二人を利用させてもらうだけよ。

「私はもう行くわ。それじゃあね、摂津に布束さん。」

すぐにでも行動に移そうと思って、二人に別れを告げてこの場を離れようとしたけれども

「待て御坂。今何て言った？布束？布束って言ったよな？もしかしてこの女の名前は布束砥信か？」

摂津が私の肩を掴み私を引き留めるけど、どこか様子がおかしい。

私の肩を掴む手にはかなり力が入り、瞳孔は開き、眼は血走っている。

「ちょっと痛いじゃない！確かに彼女は布束砥信さんだけど。それがどうしたのよ？」

摂津はそうかと呟いた後、懐からおもむろに銃を取り出して布束さんに向けて構える。

「ちょ、ちょっとあんた何考えてるのよ!？」

「邪魔するな御坂。俺にはこいつを殺す権利がある。俺がこの女を殺さなくちゃいけないんだよ。」

銃を向けられた布束さんは思わず身構え、私は摂津を止めに入る。

「Why? 私には殺される理由がわからないわ。」

「『学習装置機能拡張計画』を覚えているか？」

『学習装置機能拡張計画』? 『学習装置』と言ったら五感に働きかけて脳に影響を与え、レベルを上げたり電気的情報を入力する物よね? それと何か関係があるっていうの?

「まさかあの計画の?」

思い当たる事があったのか布束さんの表情が曇る。

「そつだ!俺はあの計画の生き残りだ。」

摂津は憎しみと怒りの混じった形相で布束さんを睨みつけている。

「『学習装置機能拡張計画』が何なのかは知らないけど、少し落ち着きなさいよ。」

私がそう言った直後に摂津は布束さんに向けられていた銃をこつちに向けた。

「何も知らないくせに口出しすんじゃないねえ!」

目も合ったけど、摂津は思わずゾツとするような冷たい目をしていた。

そしてすぐに銃を布束さんに向けなおす。

「死ぬ覚悟はできているんだろうな？」

「OKわかったわ。あれも私の罪の一つ。殺されても仕方ないことかもしれないわ。でもそれはこの『絶対能力進化』計画にケリがついてからにしてちょうだい。」

布束さんが殺される事を受け入れるような罪を犯し、この二人を結びつける『学習装置機能拡張計画』って一体何なのよ？

「チツ！！いいだろう。しばらくは生かしておく。その方が俺の利益にもなりそうだからな…だがいずれ殺す。必ず殺す。必ずだ！！」

第十一話

八月十七日

御坂に情報を渡した翌日。

起きてから朝食のパンを食べつつ、テレビのスイッチを入れて朝のニュースを見ていると、多数の研究施設でマシントラブルが原因の火事が発生したと言うニュースが目に入った。

その研究施設は全て『絶対能力進化』計画の関連施設

たぶん御坂が昨日の夜に通信回線からサイバーテロ攻撃で、研究機材の爆破を行ったんだろな。

これなら全関連施設のうち七割弱の十九施設の機能を停止させられたはず。

これで奴らはネットを介した外部との通信手段を遮断したはず、そうなると施設同士で大量の情報のやり取りはスタッフを行き来させるくらいに限られる。

ならば俺はその情報を持って移動するスタッフを狙うとするか。

施設間の情報交換を遮断することで連携を断ち、孤立させることで次の直接襲撃の効率を上げることができるな。

問題はどうかやってスタッフを狙うかだな。

相手スタッフの移動手段はおそらく車。

スタッフが持っているデータを奪うか？これだとまた施設にデータを取りに戻ればいいだけだ。

事故に見せかけて消えてもらうか？本当に事故だと思われた奴らに恐怖の一つも与えられないな。

狙撃して殺すか？人目につく場所で狙撃したら目立つ可能性があるし、警備員か風紀委員が出てくる可能性もありえる。

それじゃあスタッフが研究所の敷地内で車に乗った直後か、車から降りる直前。

これなら一般人には知られないし、研究所の奴らには恐怖を教えてやれるな。

警備員を呼ぼうにも、自分たちの行っている非人道的な実験がばれるかもしれないから簡単には呼べないだろう。

でもこれだと研究所の警備が強化され、御坂の直接襲撃の邪魔になるな。

それなら一般人にばれないように誘拐するか。

そうすればスタッフに護衛の警備スタッフも付けなくちゃいけないから研究所の警備は薄くなるだろう。

じゃあこの案でやるか。

そうと決まれば早速実行に移すのでしょうか。

俺は携帯を取り出し、下部組織のメンバーに連絡を入れる。

「人を監禁できそうな場所と俺の狙撃銃、レッカー車と救急車に偽装させた車、後は普通の乗用車を用意してくれ。」

「目標。交差点を曲がってそっちに向かいます。」

「了解。」

俺は計画の中枢を担っていると予想している製薬会社の近くの大通りに面しているビルの屋上にいる。

俺の予想が当たっているのなら、あの製薬会社に関連施設から情報が集まるはず。

そして今まともに稼働している関連施設から製薬会社のビルに行くうとするなら、この大通りを通るのが一番早い。

もつとも、この道を通らずに製薬会社にたどり着くルートは工事つて事にして下部組織の連中に封鎖させている訳だけど。

各関連施設を監視させている下部組織のメンバーからの報告があり、連絡用のスタッフは俺の予想通り車で研究施設を出発してこっちに向かつて来ているらしい。

報告にあつた車と一致する特徴とナンバーは…来た！あの車か。

俺はビルの屋上から狙撃銃を構えて、車の前輪を狙い撃つて破壊する。

片方の前輪を破壊されてバランスを失つた車はコントロールできなくなり、中央分離帯に突っ込んでようやく止まる。

「よしっ！また成功。それじゃあ回収しておいてくれ。」

すぐに救急隊員に変装した下部組織の連中が救急車で駆けつけ、連絡用スタッフを救急車に乗せて連れて行く。

奴は今から病院に行くと思っているだろうが、残念。

君が今から連れて行かれるのは刑務所がマシと思えるような闇の中だ。

乗っていた車もレッカー車ですぐに撤去され、その道はいつも通り何も起きなかった時と同じに戻っていた。

これで5人目か

俺は再び下部組織に連絡を入れる。

「次に動きが有りそうな研究所はどこだ？」

さて、今日一日で何人回収できるのかな？

S i d e 御坂美琴

通信回線を利用した攻撃が通じなくなつて、私は直接研究施設に乗り込んで破壊活動を行っていた。

あと二ヶ所今晚中に潰したいのに、ここ数日ぶつ通しで動いていたせいか体がまともに動かない。

クソッ！動きなさいよ私の体！

私は次の施設に向かって移動していたけど、途中で力尽きて動けなくなってしまう。

でも、そんな時

「よう御坂。元気そうで何よりだ。」

今の私が元気そうに見えるって言うのなら、まずは眼科に行く事をおススメするわよ。

そう言い返すと、摂津はそんだけ言えればまだまだ元気じゃねえか、と言いながら車から降りてきて私を担ぎ上げ、助手席に乗せて車を発進させる。

「アンタ何するのよ。今日中にあと二ヶ所潰さないといけないのよ。」

「落ち着け。そんなフラフラの状態のお前じゃ無理だ。」

そう言いながら私にドリンクを渡してくる。

何これ？

「栄養ドリンクだ。とりあえずそれ飲んでしばらく休め。その間に俺がその二ヶ所を潰しておいてやるよ。」

今日だけだからな、と摂津は続ける。

やっぱりこいつ根はいい奴なのかもしれない。

それじゃあ今回だけは甘えさせてもらおうかな。

久しぶりにゆつくりしたせいか、そのまま私の意識は徐々に無くなっていた。

次に私が目を覚ましたのはあれからだいたい二時間半経ったくらいだった。

摂津の車の窓から周りを見てみたけど、私がターゲットにしていた研究施設が見えたからその近くみたいね。

ただその研究施設からは黒煙が、やや明るくなった早朝の空に確認できる。

どうやら派手にやってくれたみたいね。

「なんだ起きたのか。もう少し休んでおけよ。」

摂津も戻って来たみたい。

「もう二ヶ所とも終わったの？」

「当然だろ。二ヶ所とも終わらせておいた。」

そう言いながら車に乗り込んで、発進させる。

移動時間の事も考えると、一ヶ所に一時間も掛けてないわね。

私でさえ一時間は掛かったのに

「ちょっと早すぎじゃない？」

「そうか？この程度楽勝だろ。」

この程度って…こいつ普段どれだけ危ない事をやってるの？

「ねえ。あんた何でこんな事やってるの？」

摂津は何も答えない。

「『学習装置機能拡張計画』って言うのが関わってるの？」

この質問にも摂津は答えなかった。

「あんたがこだわってる『学習装置機能拡張計画』って一体何なのよ？」

摂津は黙っていたが、しばらく経ってからようやく重い口を開いた。

『学習装置機能拡張計画』

新しい機能を持たせた学習装置を作るための計画で、色々な学者が監修の下で新たな機能を持たせた学習装置のプロトタイプが製造されたらしい。

その機能とは出力。

記憶や人格などの脳内の情報をデータ化し、コピーする機能

そしてそのプロトタイプのパフォーマンスを『樹形図の設計者』に演算させていた。

「それじゃあどうやってそのデータが正しいと証明していたと思う？」

確かに出ているデータは『樹形図の設計者』の演算結果で、実験で実際に出たデータじゃない。」

「答えは簡単だ。多くの『置き去り（チャイルドエラー）』を実験体にしてデータを取っていたんだよ。」

そしてその実験ではかなりの『置き去り』が犠牲になったらしい。

木山春生が関わっていた実験といい、この前のテレステーナの実験といい、今回の絶対能力進化計画といい、今の話の学習装置機能拡張計画といい、イカれた実験ばかりね。

「…そして俺はその計画の被験者の一人だ。」

つまり。

こいつも春上さん達と同じ『置き去り』って訳なのね。

「…あんたも色々大変なのね。」

「憐れむんじゃねえ。今はそう言う場合じゃねえだろ。自分の心配をしてる。」

うるさいわね。わかってるわよ。

摂津のおかげで少し休めたし、私も頑張らないと。

八月十九日

計画は順調。

夕方まで連絡用スタッフの誘拐を行い、その後下部組織の奴らとファミレスに飯を食いに行く。

「今日誘拐した人数って何人だっけ？」

最近誘拐ばかりしていたから、今日は数える事すらなかった。

「確か今日は7人です。」

7人か…初日と比べるとかなり減ったな。

それだけ御坂が潰した研究所の数が多いって事か。

「監禁場所にまだ入るか余裕はあるか？」

ここ数日で30人以上捕まえているからそろそろスペースが無くなっているだろう。

「入って後5人くらいです。余裕が無くなった時は新しい場所を用意するから大丈夫です。」

その時はそうするしかないな。

その時は頼んだ、俺は飯を食いながらそう言う。

「それにしても何で研究所のスタッフを誘拐してるんすか？」

「さあな。上には上なりの考えがあるんだろ。」

本当は知っている。

だがしかし、雲川さんからの依頼だからいつも一緒に仕事している
こいつらにでも、できるだけ情報は漏らす訳にはいかない。

そんな時、俺の携帯に着信が入る。

着信は雲川さんからだった。

「悪い。ちよつと席外す。」

そう言い残して、俺は急いで店の外に出てから電話に出る。

「緊急の情報なんだけど。」

緊急と言う割にそこまで慌てた口調じゃなかったから、こっちも危機感を持っていなかった。

しかし

「『絶対能力進化』計画側が理事会に防衛を依頼して、暗部が防衛

することになったから。」

暗部が出てくるのか…厄介なことになってきたな。

「どの組織が防衛に派遣されたんですか？」

「『アイテム』だけ。」

よりによって『アイテム』かよ。

『アイテム』と言ったら『スクール』と並ぶほどの暗部では強力な組織だ。

雲川さんからの情報提供に感謝しつつ電話を切り、とりあえず御坂に警告をしようと思って電話をかける。

だが、持っていないのかまったく電話に出ない。

クソッ！電話くらい出るよ！

ならば直接研究所に行って『アイテム』の連中と御坂が遭遇する前に警告しておかないと。

昨日までにほとんどの関連施設が潰されたから残っているのは二ヶ所。

Sプロセッサ社脳神経応用分析所と病理解析研究所。

そのどっちかに行くはず。

どっちから行くか聞いておけばよかった。

「お前ら悪いな。仕事になりそうだからしばらく待機しといてくれ。」

「

ファミレスの中にいた奴らに声をかけ、俺は御坂に会うために急ぐ。

どっちを襲撃するかわからないから、まずはSプロセッサ社脳神経応用分析所だ。

第十二話

八月十九日

「ここか」

日も落ち、暗くなった道を急ぎ、Sプロセッサ社脳神経応用分析所へ向かう。

到着して所内の様子を窺うと、研究者達がトラックに研究資料とかを運び込んでいた。

どうやらこの施設は放棄するみたいだな。

そして人目に付かないような所に雰囲気の違いトラックが数台止まっていた。

他に『アイテム』の下部組織のメンバーと思われる奴らが数人いる。

チッ！奴らの方が早かったか。

まったく、暗部にしては珍しく仕事熱心な奴らだな。

御坂はこっちに来ていないのか？それとも『アイテム』の連中の妨害を受けているのか？

俺は見つからないように車の側に移動し、物陰に隠れて奴らの話に耳を傾ける。

男の一人が他の奴らに真剣な表情で話しかけた。

襲撃者に関する何か重要な情報を話すのか？

俺は一言も聞き逃さないように神経を張りつめる。

緊張の一瞬だな。

「なあお前ら。アイテムのメンバーの中で誰を抱きたい？」

思わず力が抜けそうになる。

その話題は修学旅行の夜の定番であって、今するような会話じゃないだろうが！

「俺はフレンダさんだな。正直あのスレンダーなボディはたまらん。」

貧乳は希少価値だからな、ステータスだからな、と一部の男たちが賛同している。

「俺は滝壺さんかな。あの人ジャージ脱ぐと結構すごいんだぜ！」

天然なところがあるけど、あの人が一番アイテムの中じゃ優しいからな、と何人かが頷く。

「俺は麦野さんだ。人を見下すようなあの冷たい目！抱きたいと言っつより、俺は踏みたい！」

「『『『』』ただの変態じゃねーか！！』』』』」

その場に居たほぼ全員につっこまれていた。

俺も思わずつつこんでしまいそうになったじゃねえか。

まあ、人の趣味は人それぞれだけだよ。

後、話題に上がらなかった絹旗ドンマイ。

そんな男たちが盛り上がってる中、男の一人に連絡が入る。

その直後連絡を受けた男の雰囲気が変わり、それに合わせるように周りの男たちの雰囲気も変わった。

「所内の絹旗さんからの連絡だ。忍び込んでいた侵入者を捕まえたからこっちに運んでくるそうだ。」

侵入者が捕まった？

いくら御坂でも暗部組織を相手にするのは無理だったのか？

体調が万全じゃなくても一対一ならフレンダや絹旗、滝壺くらい相手にできるだろうけど、問題はアイツだな。

『アイテム』のリーダーにして、レベル5の第四位『原子崩し（メルトダウン）』麦野沈利

一撃の攻撃力だけなら御坂より上かもしれない。

流石に助けないとこつちの計画に支障が出る。

でも、そんな化け物に捕まった御坂を俺で助けられるのか？

普通に行けば無理だ。

それなら普通じゃない方法でやればいい。

例えば奇襲するのも一つの手だな。

『アイテム』の連中は御坂に協力者がいることは知らないはずだし、俺も尻尾を掴ませるようなへまはしていない。

そんな状況の中、『アイテム』の連中から御坂を一番奪い返しやす
いタイミングはいつだ？

『アイテム』が俺達『スクール』と同じなら、あの四人はたぶんキ
ヤンピングカーで移動して、御坂は他の車で運ばれるはず。

あの四人と下部組織の連中が別行動になる可能性が高い。

ならば狙うとしたらその時、まともにあの四人と殺し合う必要は無
い。

俺は御坂が乗せられる車を確認するため、物陰から様子を窺ってい
ると建物の中から絹旗と女を担いだスキンヘッドの男が出てくる。

御坂じゃない？あれは…布束砥信か。

侵入者ってあの人の事なのか…それじゃあ御坂はもう一ヶ所の方が！

今の所こっちでは確認できている主要メンバーは絹旗一人。

という事は他の三人はもう一ヶ所の病理解析研究所の方で御坂と戦闘中って事か？

御坂には悪いけど、こっちも放っておくことはできない。

あの人からこっちの情報を引き出されるといろいろと面倒なことになるから救出するなり、口封じをするべきだな。

逃げる事も考えると殺した方が手っ取り早い。

あの計画の関係者の布束砥信には恨みもあるし…

布束を殺し、計画の妨害に計画のデータの破壊と関係者の抹殺ために俺は奇襲するタイミングを窺っていたけど、運が悪いことにキヤンピングカーがやって来て、フレンダと滝壺が降りてくる。

どうやら麦野はいないらしい。

それを確認した絹旗が誰かに電話をかけた。

麦野に電話をかけているらしく、これからこの施設の研究者の護送を行うみたいで次々と下部組織の連中が集まってくる。

チッ！ツイてないな、総勢で30人くらいか？

カバンの中を見て装備を確認してみると、今の俺の手持ちの武器はコイル式短機関銃一つと連射式超小型無反動砲が一つ、後はスモ―

クグレネード。

この装備であの人数をやらないといけないのか…なかなか骨が折れそうだ。

Side 『アイテム』 下部組織構成員

Sプロセッサ社脳神経応用分析所の防衛をし、侵入者を捕まえた俺たちは分析所の研究者と研究データ、あと侵入者を護送してこの仕事は終わる。

病理解析研究所に出た襲撃者は麦野さんがなんとかしてくれるだろう。

なんてこの時は気楽に考えていた。

「荷物も積み終わったし、先に行ってる絹旗さん達とさっさと合流しようぜ。」

仲間たちと話しながら自動車に乗り込もうとしていたら、ヒュンというような風を切るような音が聞こえ、次の瞬間研究データを積ん

でいたトラックが轟音と共に爆発炎上した。

燃え上がるトラックから叫び声を上げ、火達磨になりながら出て来る仲間や吹き飛ばされてくる仲間。

慌てて駆け寄って火を消すが、皮膚は焼け、手足は千切れていたり、腹が裂けて内蔵が飛び出していたりして、助かりそうもない。

クソツタレ！一体何が起こった！？

そう思ったが、次の瞬間にはその答えが出た。

爆音と共に真つ赤な炎に包まれる別のトラック。

畜生！敵襲か？！

「物陰に隠れるぞ！誰かフレンドさん達に連絡しろ！　よくもあいつらを殺ってくれたな…見つけ出してぶっ殺してやる！」

生き残っているメンバーは慌てて物陰に隠れるが、その間にも敵の攻撃は続き、次々とデータや機材を積んだ車両が破壊されていく。

懷から銃を取り出し、物陰から攻撃を受けた方向の様子を窺うけど、見えるのは車両や機材の残骸や仲間や研究員の死体。

クソツ！このままだと全滅だな。

「誰か絹旗さん達に連絡できたか？」

「ちょっと待て！今電話してる。…もしもし！？緊急ガアッ！」

電話をかけていた仲間の頭や胴体に穴が開き、大量の血を流しながら倒れる。

「チツ！応援なんか呼んでんじゃねえ。」

いつの間にかそこにいた短機関銃を持った血塗れ男が死んだ仲間の携帯を拾い上げ

「すいませう、間違えました。こちらの事はお任せください。それでは失礼します。」

それだけ手短かに告げ、一方的に電話を切る。

「さてと。お前ら、殺される準備いいか？もちろん準備できてるよなあ！？」

携帯をそこらへんに投げ捨て、男は笑みを浮かべながら銃を構えて、それが当然の事のように言つてのけた。

でも俺の印象に残ったのは持っている短機関銃なんかじゃなく、狂気を帯びた笑み。

あの笑顔はどこかで見た：そう、あれは人殺しで喜びを得ている連中が人を殺してる最中と同じ顔。

男は口元に着いている血、怪我が無さそうな所見るとおそらくは返り血、それを舌で舐めとり

「アハッ！ アハ、
アハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ――

「ッ！！！！」

突然狂ったように大声で笑い出した。

その光景に思わずゾツとしたのか仲間達が一斉に銃を撃ち始めるけど、弾は逸れて一発も当たらない。

攻撃を受けた男はそれでも笑い続け、そして持っていた短機関銃を乱射した。

阿鼻叫喚。

絶叫を上げ、血を流し、倒れていく仲間達。

それはまさに地獄絵図のような光景。

俺自身も脇腹と太腿に銃弾をくらって倒れてしまう。

「チクシヨウが！麦野さん達さえいけばデメエーなんか！！」

「アハハッ！いればなんだ？俺なんか一瞬か？ヒヤハッ！確かにそうだろうな。」

いつの間にか奴がこっちに歩いて近づいて来ていた。

「でも、でもよ。今はいねえだろうが！つまり誰もお前を助けてくれねえ！お前は助からねえ！！だからさ……さつさと死んじまえよ！！」

そして俺に銃口が向けられる。

「まったく。電話くらい出るよ。」

俺は第七学区の外れにある小高い丘の上の広場のベンチに座り、そこから第七学区の中心街を眺めながら、Sプロセッサ社脳神経応用分析所の事を御坂に連絡しようとする。

だが御坂は一向に電話に出る気配が無い。

まったく、最高に気分がいいってのに。

でもあの瞬間は本当に最高だった。

捕まっていた布束を、わざと砲弾を撃ち込まなかった車から引きずり出して銃弾を思っ存分撃ち込んでやった。

あの女の恐怖と痛みで歪むあの顔と血の味を思い出すと

「ヒヤハハッ!!」

ダメだ…笑い声が込み上げてくる。

でも折角の殺しの余韻と喜びを邪魔してくる馬鹿がいる。

「こんな所で一人で笑っていると超不審者ですよ。それに笑い方が超キモいです。」

音も無く、すぐ側まで接近していたフードを被った茶髪の少女、絹旗最愛がそこにいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3597n/>

とある暗部の電撃使い

2010年11月23日17時11分発行